

鳥取市小中学校道徳郷土資料集

鳥取市の志



平成25年12月
鳥取市教育委員会

不
思
不
思
不
思



はじめに

鳥取市では、教育ビジョン「ふるさとを思い 志をもつ子」を掲げ、心を育てる様々な取組を行ってまいりました。各学校においても、家庭や地域と一体となつて道徳教育を推進しながら、要である道徳の授業の質を高め、活性化を図っていた、だいているところです。

鳥取の子どもたちが志を立て、これまで以上に夢や希望を持つて、理想とする自らの生き方を追求していくためには、様々な人世の先人と出会い、その生き方に学んでいくことが大切です。学校では、魅力ある人物資料を活用し、自らの生き方を覚醒させるような学習を工夫しているとありますが、鳥取市を築いてこられた人物の資料を活用し、その生き方に学ぶことで、子どもたちのふるさとを思う気持ちや志がさらに磨かれていくものと考えます。

本書でも取り上げておりますが、アシックスの創業者で世界的な企業家として活躍された鳥取市出身の故・鬼塚喜八郎氏は、志を高く持ち鳥取の外で活躍しながらも、常にふるさとを大事に思い続けた方でありました。

私は、子どもたちがどこで活躍しても、軸足は鳥取を踏みしめ、常に強固な意志を持って、理想とする生き方を目指す、そんな人物を鳥取で育てたいと考えています。今の鳥取の子どもたちが、世界へ羽ばたこうとする意欲やチャレンジ精神のもとに、鳥取の内外で活躍する姿を願うと共に、そのような人物を育むことこそ鳥取市の発展であり、教育の責務であると考えております。

この「鳥取市の志」は、これまで、各学校で作成された鳥取市にゆかりのある人物の資料を集めています。子どもたちに先輩の素晴らしい生き方や知恵を学んでほしいと思っています。また、先生方には、本書の資料を基にして、自分の学校の地域資料を作成していく足掛かりとしていただきたいと考えています。

各学校で本書が活用され、道徳の時間が一層充実したものになるよう期待しております。終わりになりますが、本書の編集に当たられた郷土資料集作成検討委員会の皆様をはじめ、熱い思いで資料を作成し提供してくださりました各学校の先生方、関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

平成二十五年十二月

鳥取市教育長 木下法広



【目次】

★ はじめに

★ わたしたちのふるさと 鳥取市

低学年

1 わたしの音楽を求めて く岡野 貞一く

〔1―(2)〕

.....

1

2 ようこそ ようこそ く因幡の源左 足利 喜三郎く

〔2―(2)〕

.....

8

中学年

1 すきな絵の勉強も く遠藤 董く

〔1―(2)〕

.....

12

2 桃の木物語 く西村 良夫く

〔4―(5)〕

.....

17

3 すいせんの里 百谷 く松本 貞義く

〔4―(5)〕

.....

22

4 貝がら節の先生 く鈴木 みどりく

〔4―(5)〕

.....

27

5 皿まわしで元気な町に く山本 勲く

〔4―(5)〕

.....

32

高学年

1 音楽に一生を捧げた人生 く岡野 貞一く

〔4―(7)〕

.....

37

中学校

- | | | | | | | |
|----|--------------|--------------------|-----------|-----------|-------|----|
| 2 | 夢に向かって走り続ける | 〓野人 岡野 雅行 | [1 (2)] | | 42 | |
| 3 | アシックス創業者 | 〓鬼塚 喜八郎 | [1 (2)] | | 46 | |
| 4 | わがものは社会のもの | 〓筧 雄平 | [4 (4)] | | 52 | |
| 5 | 自分の意志で道を切り開く | 〓女子走り幅跳び・岸本 幸子選手 | [1 (2)] | | 56 | |
| 6 | 医学の発展にかけた生涯 | 〓下田 光造 | [4 (7)] | | 60 | |
| 7 | 桜のあしながおじさん | 〓瀬川 弥太郎 | [4 (7)] | | 63 | |
| 8 | 音のないフィールド | 〓夢に向かって跳び続ける 前島 博之 | [1 (2)] | | 67 | |
| 9 | 我が国最初のX線実験者 | 〓村岡 範為 馳 | [1 (5)] | | 76 | |
| 10 | これからの日本のためには | 英字新聞が必要だ | 〓山田 季治 | [1 (2)] | | 80 |
| 1 | しゃんしゃん祭りの創始者 | 〓高田 勇 | [4 (8)] | | 85 | |
| 2 | 志あるところに道ありき | 〓山下 佐知子物語 | [1 (5)] | | 88 | |
| 3 | 村を救った郷土芸能 | 〓因幡の傘踊り 山本 徳次郎 | [4 (8)] | | 93 | |

★ 伝記資料作成のポイント

市章



市章の由来

旧藩時代に因伯の印として使用された紋章（○は文、◇は武を意味したものとされている）を一つに重ね、その中に小てん（漢字の書体の一種）の「鳥」の字を組み入れたものを、大正2年7月26日に鳥取市の市章として決めました。

鳥取市の木



さざんか

昭和18年の大震災、昭和27年の大火災で市街地のほとんどを失った鳥取市に緑を取り戻そうと、昭和43年5月2日に「鳥取市の木」とされたサザンカは、年間を通じてまちを緑で潤し、山陰の厳しい冬に花を咲かせるなど、鳥取市を代表するにふさわしい木として新鳥取市に引き継がれることとなりました。

鳥取市の花



らっきょうの花

鳥取市が全国に誇る「鳥取砂丘」において、10月から11月初旬にかけて砂の畑を赤紫のじゅうたんで覆う「らっきょうの花」は、中国原産のユリ科の多年草で、江戸時代の参勤交代の折に持ち帰られ伝わったものが最初であるとされ、今では鳥取市を代表する特産品のひとつとなっています。

鳥取市の鳥



オオルリ

オスは、頭から背、尾まで上面がコバルトブルー。美しい鳴声で知られる鳥で、ウグイス、コマドリと並んで、日本の三鳴鳥といわれています。本市では、春から秋にかけて市内全域に生息しています。特に、樗谿公園大宮池周辺、袋川・佐治川・河内川などの市内各河川の上流域でよく見かけられます。

小学校

◆
低学年

◆
中学年

わたしの音楽を求めてく岡野貞一おかのていいち



「ふるさと」を作きよ

くした鳥取市出しんとっとりしの

岡野貞一さんは、ほか

にも「日の丸」「春が来

た」「春の小川おがわ」「もみじ」「おぼろ月夜つきよ」など

たくさんたのきよくをつくっています。このよ

うな今でも歌われているすばらしいきよくを

のこすまでには、どのようなことがあったの

でしょうか。

の中でもおたがいにたすけ合いはげまし合いながらくらししていました。

貞一は、おとなしくやさしい心の子どもで、

いじわるをしたりわがままを言ったりするこ

とがないので「貞ちゃん、貞ちゃん」とよば

れて、だれからもすかれています。

小学校をそつぎようして、高等こうとう小学校へ入学

したころ、貞一の楽しみの一つに、姉について

教会へ行くことがありました。貞一は、歌を歌

うことも好きでしたが、それよりもオルガンの

音色がとても好きだったのです。

高等小学校をそつぎようするころ、貞一は、

もつとじょうずにオルガンがひけたり、歌を

た。学もんのすきなかぞくで、まずしい生活

歌ったりしたいと思うようになりました。そ

のころ、鳥取県けんから東京音楽学校とうきよおんがく（今の東京芸術大学げいじやう）へすすむ先ぱいがいたことで、貞一は、自分も音楽せん門の学校へすすみたいという思いが強くなりました。姉のたすけを受けながらいっしょうけんめいべん強にとりくみました。

ねんがんかなって東京音楽学校へ入学し、そつぎよう後も学校にのこり、先生として音楽を教えました。このころから、毎週日曜日に、教会のパイプオルガンをえんそうし、合しようたいの歌の指どうをするようになりました。パイプオルガンは、貞一にとって大すきな母や姉とはなれて生活しているさびしさ



やべん強の大へんさをわすれさせ、自分の心をおだやかにしてくれるものだったので、ひくことにはまんぞくしていました。

この教会は、東京でもっともれきしのあるすばらしい教会でした。そのころ、都内とに三つしかないパイプオルガンの一つが、この教会にあったのです。教会では、多くのコンサートがひらかれ、たくさんの方がねっ心に来て、いつもまんいんでした。このころから、貞一は、もっと多く

の人にパイプオルガンの音楽をきいてほしいというゆめをもつようになりました。貞一は、教会へ通う人々の心をつなげ、音楽のなか間をふやしていくような中心てきなそんざいとなりました。また、多くの人々にとっても、パイプオルガンは大切なそんざいとなつていったのです。

まつたのです。たて物といっしよに、貞一が毎週ひいていたパイプオルガンもおしつぶされてしまいました。そこへかけつけた貞一は、あまりのひどさにぼうぜんとしてしまいました。貞一だけでなく教会へ通つていただれもが、同じ気もちでした。

ところが、一九二三（大正一二）年九月一日、今までにない大へんなできごとがおきたのです。関東大震災かんとうだいしんさいでした。

この後、貞一たちは、今までの教会のかわりに、小さなそまつなたて物をしばらくつかつていました。みんなは、パイプオルガンの音色がなつかしく、早くもどつてきてほしいと楽しみにまつようになりました。

大きな地しんがおこり、たくさんなたて物がこわれたり、やけたりしました。

六年後、ようやく四かいだてのりっぱな教会ができました。ぼくしさんも教会へ通つているみんなも、大よろこびでした。しかし、だ



れもが、ざんねん
に思うことがあります。
ましました。それは。
まいました。貞一は、むりを言つて人をこま
らせることはしない人です。

パイプオルガンが
そなえつけられな
を考えるとねむれない夜をすごしました。教
会にひびくパイプオルガンと歌声や教会へ通

かつたことです。パイプオルガンはねだんが
とても高いのです。貞一は、
う多くの人々の音楽を楽しむ顔が頭からはな
れず、どうしてもあきらめることができなかつ
たのです。

「パイプオルガンを何とかとりつけていただ
けないものでしょうか。」
貞一は、何でも何でもパイプオルガンのこ

と、ぼくしさんにたのんでみました。しかし、
とをぼくしさんにたのんでみました。しかし、

「教会をたてるのにお金をぜんぶつかつてし
ぼくしさんは、いいへんじをしてくれません。

まったので……、それだけはどうにもなりま
もうあきらめようと思ったこともありまし
た。高かなパイプオルガンだからこそ、どう
せん。」
しても強く言うことができませんでした。

そう言われて、貞一は何も言えなくなつてし

ある日、貞一は、

「それなら、足ぶみリードオルガンでいいですから、音色のいいものをおねがいします。」

と、たのんでみました。貞一の一生けんめいなようすに、ぼくしさんは心をうたれ、

「わかりました。それなら楽きやさんに行つて、あなたの一番気に入ったオルガンをちゅうもんしてください。」

と言ってもらうことができました。

何日かたって、楽き店から大きくてりつばなオルガンがとどきました。ストップ（音色がへんかできるしかけ）つきで、やわらかくすてきな音がします。貞一が曲をひきはじめると、その音はひびきわたり、教会にいる人々

の目にはなみだ

がうかんでいま

した。貞一は、

よろこびでむね

がいつぱいにな

りました。

この後、貞一はしごとが大へんいそがしく

なりましたが、毎週教会へ通いつづけ、オルガンえんそうや歌の指どうをつづけ、四十年間休むことはなかったということです。

貞一の指どうは、きびしいものではなく、口数も少なかつたのですが、



「休んではだめですよ。」

「一生けんめいやってください。」

というのが、いつもくりかえし言われていた
ということですよ。

このことば通り、貞一は、自分の音楽をつ
づけ、多くの曲をのこすことができたのです。

（久松小学校 自作）

【わたしの音楽を求めて ～岡野貞一～】

一 ねらい

オルガンを購入することを頼み、あきらめずにオルガニストとして音楽を続ける貞一の生き方を知ることを通して、やろうと決めたことを最後までやり遂げようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

- ・ 本資料は、鳥取市出身で久松小学校（当時は高等小学校）を卒業した作曲家岡野貞一の生き方を児童に伝えたいという意図で自作したものである。貞一は、文部省唱歌の作曲家としても有名であるが、今回は、オルガニストとして聖歌隊の指導者であったことに視点を当て資料を作成した。
- ・ 小さい頃からオルガンの音色に魅せられた貞一は、聖歌隊の指導者として四十年間オルガニストを続けた。その中で、関東大震災が起こる。教会の崩壊とともに心の支えだったパイプオルガンも失ってしまった。その後、なんとかオルガンを購入してもらい、亡くなるまでどんなに忙しくても毎週聖歌隊の指導者としての仕事を続けてきたのである。
- ・ パイプオルガンの音を多くの人にきいてもらい、音楽を愛する人を少しでも増やしたいという夢を持ち続け、何事にもあきらめない貞一の姿を通して努力することの大切さを児童に気づかせたい。

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料「わたしの音楽を求めて」を聞き、貞一の気持ちを中心に話し合う。</p> <p>○地震でおしつぶされたパイプオルガンを見た貞一は、どんな気持ちだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ もうパイプオルガンの音楽を聞いてもらうことはできないのか。 <p>○ねむれない夜を過ごした貞一は、どんなことを考えていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どうしても、教会でオルガンを弾いて、たくさんの人を楽しませたい。 <p>◎新しいオルガンをひいている時、貞一はどんな気持ちだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ やっと教会に音楽が戻ってきた。みんなに聞いてもらえてうれしい。 <p>2 今日の学習で学んだことを発表しよう。</p> <p>○今日の学習で自分にも取り入れたいなと思ったことを発表しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ やると決めたらあきらめずに続けること。 ・好きなことなら最後までやりとげること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一瞬にして教会もパイプオルガンも失ったことに呆然としてしまう貞一の気持ちや、教会の人々の目に浮かんだ涙に気づいた時の貞一の満足感に共感させる。その後も、ずっと弾き続けようという決意にもふれる。 ・ 貞一の生き方から学んだことを発表する中で、目標を決めたらあきらめずに続けていこうとする心情を高めたい。

ようこそ ようこそ

因幡いなばの源左げんざ
足利喜三郎あしかがきさぶろう

おさないころのわたしは、祖母そぼから「因幡の源左」の話を聞くのがいちばんの楽しみでした。いつもきまつて「ようこそ ようこそ」でおわるのがおもしろくて、每まばんのように話してもらったものです。



むかし、源左げんざ（天保てんぽう十三年生まれ）という男がおった。源左は村いちばんのはたらきもので、その日も夜が明

ける前から、山草をかったり、はたけをたがやしたりと、休む間もなくはたらいておった。

夕ぐれどきのことだった。一日のしごとをおわらせて家に帰る源左は、田んぼ道にさしかかったところで、赤んぼうのなき声に気づいたそう。どうしたことかとあたりを見回すと、赤んぼうの近くで、母親らしい姉さんがいそがしそうに田んぼの草をとっておる。びっくりした源左は、

「ややもないとるに、早よう家につれて帰つてやったがええがのう。」

と声をかけた。するとあねさんは、「ここだけはとっておかんと、あしたがこまるんです。それで、もうちよつと、もうちよつ

とと思つてやつとるんです。」

と、草をとりながらへんじをした。それを聞いた源左は、

「それじゃあ、代わりにその草をとらしてもらおうかのう。」

と言うと、田んぼに入つて草をとりはじめた。

その夜、お月さまが高くのぼつても、源左

は家にもどらんかった。家のものが心ばいし、

あつちこつちをさが

すと、くらい田んぼ

の中で、一人せつせ

と草をとる源左がお

るではないか。おど

ろいた家のものが、



「おじいさん、よその田んぼの草をそんなにきれいにとらんでもええがな。」

と言うと、源左は、

「そんな気の小さいこと言わんでもええ。こまつとる人がおるときには、自分の田んぼよその田んぼのくべつはないだけのう。」

と言つて、草とりをつづけた。

田んぼをすっかりきれいにして帰つてきた

源左は、おそいばんめしを食べながら、

「今日は、また大もうけをさせてもらった。

ようこそ ようこそ。」

と家のものに話したのだったと。

ばあさまから聞いた源左の話は、ほかにも

たくさんありました。

知らない人にもつを、「ちくりもたしてつかんせえ」ともって歩いた話や、山のとうげまでお年よりをおぶって歩いた話も聞きました。

こうした源左の話は三百ほどもありますが、どれも自分のしごとは後まわしにして、

こまっている人に親切にしたことばかりです。でも源左は、それを人に話して自まんしたり、いばったりすることはありませんでした。それどころか、「ようさせてくださいました」と親切にした人に、自分のほうがおれいを言ったというのです。人によろこんでもらえることが、源左には何よりもうれしいことだった

のでしよう。

昭和五年（一九三〇年）に八十九歳さいでなくなる日まで、源左の口から「ようこそ ようこそ」のことばがきえることはありませんでした。

（美保小学校 自作）

【 ようこそ ようこそ 】

～ 因幡の源左 足利喜三郎 ～

一 ねらい

源左の人柄や他者を思いやる姿に触れることを通して、相手の立場に立って進んで親切にしようとする意欲を高める。

二 資料選定の理由

・源左(足利喜三郎)は、天保十三年(一八四二年)に鳥取県(青谷町)の小さな村に農家の子として生まれた。十八歳のときに父親を病で亡くし、それからは父に代わって家族のために働いた。人のために尽くせることに感謝し、それを心から喜びと感ずる源左の姿が子どもの心に深く響き、これからの生き方に一つの光を与えることになるであろう。

・源左は文字を読むことも書くこともできなかったと言われている。そんな源左のことを今も多くの人が語り継いでいる。授業の最後に、「ようこそ ようこそ」の文字が入った鳥取市役所の額や、店先に掲げられた幟の写真を見せることで、今もなお多くの人々に愛されていることを実感させることができる。

三 参考文献

- 柳宗悦・衣笠一省『妙好人 因幡の源左』百華苑刊、一九六〇年
- 梯實圓『妙好人のことは』法蔵館、一九八九年
- 藤木てるみ『妙好人 源左さん』(上)(下)探究社、一九九九年

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料「ようこそ ようこそ」を読み、源左の行動を支えている思いについて話し合う。</p> <p>○源左はなぜ、夜になっても草とりを続けたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困っている人を助けることは当たり前だから。 <p>○草とりをして、源左は何を「大もうけ」したのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困っている人を助けることができたときの気持ちを儲けた。 <p>◎源左はどういう思いで「ようこそ ようこそ」と声に出したのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰かを助けることを今日もさせていただいたという感謝の気持ち。 <p>2 自分の心の中にある思いやりの心について振り返る。</p> <p>○今日の学習で自分にも取り入れたいなと思ったことを発表しましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困っている人に進んで優しくしている姿。 ・してやったという気持ちではなく、自分がしますと動く姿。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の田んぼではないこと、広い田んぼであること、夜になっても暗い中で草取りを続けたことに注目させ、大変な労働であったことを押さえながら考えさせる。 ・困っている人を助けることが喜びであり、その気持ちを「もうけた」ことに気づかせたい。 ・「してあげる」のではなく、「させていただく」という捉えであり、感謝していることに気づかせる。 ・心のノートを活用する。

すきな絵の勉強も
↳ 遠藤 董



董は、一八五三年、鳥取

市の材木町で鳥取藩士遠

藤重嘉の長男として生ま

れました。（幼名「東造」

三十三歳で「董」と改名）

七歳のころ父から、

なるようにがんばります。」

と答えました。父は大きくうなずき、だまって董の頭をなでるのでした。さつそく、書（習字）の勉強を始めました。はりきって始めた書でしたが、なれるまでにはしつぱいも多く、自分の思ったようにいきませんでした。筆の持ち方から何度も何度もくり返し学びました。どんなに時間がかかっても、教えられたことができるようになるまで練習を続けました。

「これから新しい時代になっていく。世の中に名をのこそうという気持ちが少しでもあるのなら、今からしつかりと勉強をするがいい。」
と、言われました。董は父のことが大すきでそんなけいしていました。すぐに、

「父上、私もそうなりたいと思います。りつぱな人に

九歳のころ、董はもつとたくさん勉強がしたいと
考え、父におねがいして、漢文やフランス語、武術など、
今までしたことの無い新しいことも学び始めました。
知らなかったことが分かってくると、もつと知りたく
なって、む中で勉強していきました。

董にはもう一つ、どうしてもやりたいことがあります

した。それは絵の勉強でした。小さいころから絵をか
くことが好きで、食べるのもねるのもわすれるくらい
でした。絵をかくたびに董はおどろきや発見をしまし
た。どうしたら自分が見た通りに絵がかけられるのか、知
りたくて知りたくてたまらなくなりました。

（絵の先生に教えてもらおうと、たくさんいろいろな
ことが分かるはずだ。もっと上手になりたい。）
そう思った董は、父にたのみました。

「父上、おねがいがあります。私は絵を学びたいので
す。絵の勉強をさせてください。」

父はすぐにきびしい顔になり、

「絵の勉強は、しょう来にはひつようないものだ。絵
にむ中になっていて、他の勉強はどうするのだ。」

と大きな声でしかりました。董は、ただかなしくてた

まりませんでした。

へやにもどった董は、つくえにおいていた自分の絵
をじっと見つめるばかりでした。

（たしかにその通りだ。でも、絵をかくのはこんなに
楽しいのになあ。あきらめるのか。）

そんな日が何日か続きました。大きなため息をつい
てばかりで、何も手につきませんでした。かきかけの
絵をじっと見つめていた董はしばらくして「ようし。」

と言つて、立ち上がりました。

それからというもの、董は、毎日毎日ひたすら勉強
にはげみながら、父へのおねがいも続けました。

いつものように父にしかられたある日。董は、ぼと
ぼととゆかの板に落ちたなみだで、知らず知らずのう
ちに絵をかいていました。そんなすがたを見た父はゆっ



くりと、

「他の勉強もしつかり
とするのであれば、
すきな絵の勉強もす
るがいい。」

る時間を短くして、す

きな絵の勉強もしまし
た。目をこすりながら
絵をかき、筆を持った
ままでねてしまうこと



と、言ったのでした。董は、何度も何度も父に頭を下げ、
一生けん命やろうと心にちかうのでした。

もありましたが、それもずっと続けていきました。

それから董は、今まで以上に勉強に打ちこみました。

二十一歳の董は、先生になるための学校に入りました。

たくさんのお書物を読むことは、やればやるほどむずか
しく、分かるまでにずいぶん時間がかかりました。明
け方までかかることもしばしばありました。つかれて
ねむくてしかたがありませんでした。それでも董は、
分かるまでやりました。ゆるしてくれただの言葉をい
つも思い出しながら、続けていきました。そして、ね

た。そこでは、三年かかる勉強を一年八ヶ月で終える
ことができました。そして、すぐに先生になり、多く
の子どもに学ぶ楽しさを教えました。三十二歳で校長
になってからもずっと教え続けました。その後、図書
館や女学校、もう学校やろう学校をつくりました。
さらに、鳥取県ではじめて油絵をかき、たくさんのお



絵をのこしました。

参考文献

これは、董がかいた

「郷土教育の父 遠藤 董（第一輯）」

『鳥取城』という、

（遠藤董先生遺徳顕彰会）

油絵の作ひんです。

「郷土教育の父 遠藤 董（第二輯）」

いつも見ていた久松

（遠藤董先生遺徳顕彰会）

山や鳥取城をていね

「遠藤董と盲・ろう教育」 塩田健夫著

（今井書店鳥取出版企画室）

いにかきあげていま

す。石がきや久松山

の木までも細かくか

かれたすばらしい作ひんで、
今でも県立図書館にのこ
されています。

【すきな絵の勉強も ～ 遠藤 董 ～】

一 ねらい

将来のための勉強も自分の好きな絵の勉強もする董の気持ちを考えることを通して、自分でやろうと決めたことは粘り強く最後までやり遂げようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・鳥取県の教育に大きく貢献し、数々の偉業を成し遂げた人物の幼少の頃を中心に取り上げた資料である。将来のための学問と自分の好きな絵の勉強を両立しながら努力した董の姿をえがいた資料である。

・「しなくてはならないこと」と同様に「やりたいこと」もやろうと決心するまでの董の葛藤は、児童にとって共感できるものである。悩んだ末に決めたことはどんなに苦しくてもやり遂げた董の心の強さを学ばせたい。

三 参考文献

- ・『郷土教育の父 遠藤董（第一、二輯）』遠藤董先生遺徳顕彰会
- ・『遠藤董と盲・ろう教育』塩田健夫著（今井書店鳥取出版企画）

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、董の気持ちについて話し合う。</p> <p>○董はどんな気持ちで勉強していたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父のような立派なひとになりたい。 <p>◎絵の勉強を父から反対された董は、自分の部屋でどんなことを考えていただろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好きな絵の勉強をあきらめられない。 ・他の勉強も大事だが、絵の勉強もぜひやりたい。 <p>○父に絵の勉強を許してもらった後、董はどんな気持ちでずっと勉強を続けたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵の勉強も他の勉強もがんばりたい。 ・やっぱり好きな勉強は楽しい。 <p>2 学習をふり返り、学んだことを話し合う。</p> <p>○遠藤董さんの学習から、これからの自分に生かしていきたいことはどんなことですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が本当に好きな勉強をがんばりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当時の時代背景が勉強を始めるきっかけにもなっているのので、補説して父の願いや董の思いを確認する。 ・将来の目標と自分のやりたいことの中で董の迷いを考えさせ、いろいろな気持ちがあったことに気づかせる。 ・董の生き方から学んだことを自分の体験と重ねて振り返らせる。

桃の木物語
西村良夫

ある春の日、

「おじさん、そこで何をされていますか。」

と、桃の木の成長の様子を小学校

に見に来ていた私は、女の子に

声をかけられ、ふり向きました。女の子は、木を消毒

している私を不思議そうに見ていました。

「おじさんはなあ、桃の木がすくすくと大きくなって
いるか見に来たんだよ。」

「なんで木の様子を見に来られたのですか。おじさん
が植えてくださったのですか。この木は春に赤い花
が咲きますよ。」



「この木はな、おじさんの父さんがずっと昔に子ども
達のために植えた桃の木だよ。大きくなっている
か、じょうぶに育っているか心配になって見に来た
んだ。」

「おじさんのお父さんが植えてくださったのですか。
ありがとうございます。」

そう言うつて校舎の方にかけて行きました。

私は、「桃の木のことを、小学校の子どもたちに伝え
たいな。」と、思いました。と言うのは、この木は父と
私が二代にわたって、用瀬のあちこちに植えてきた木
の一本だからです。なぜ、植えてきたか話しましょう。

みなさんの住んでいる用瀬町は、昭和三十年に、社村
と用瀬町と大村が合併してできました。そして昭和六十
年に町制三十周年記念の行事を行いました。その時、

町の花は「桃」、町の木は「松」と
制定せいだいていされました。桃の木は「流し
びなの里 用瀬」にぴったりの花
でしょう。だって、ひな祭りのこ
とを桃の節句せつくとも言いますからね。



ところが、その頃は用瀬に、桃の木があまりありま
せんでした。そこで、父は、庭の赤い桃は、夏に小さ
な実をつける。落ちた実を土にうめて、実から芽を出
させて育ててみよう。そうしたら桃の木がたくさんで
きるだろう。桃の木を育て、町内に町の木を増ふやそう。
そうして、名実めいじつともに流しびなの里を桃の花が咲く桃
の町にしようと考えたのでした。

その後、父は、友人から白と桃色の木をもらい、次
から次とたくさんなえぎの苗木を育てました。命というもの

は、不思議ふしぎなもので、うめて
一年目の春に芽を出す木もあ
れば、二年目に芽を出すもの
もあります。



「命は不思議ふしぎだな。命って引きつがれるものだな。」
とよく話していました。そして、親しい友人のところ
へ行く時は、いつも桃の苗木なえぎを持って出かけ、必かならず、
「あなたの桃の木は、第〇号です。いつまでもかわい
がってやってください。」

と言って育て方を書いた紙と
いっしょに苗木なえぎを渡わたしていま
した。

学校の体育館横の桃の木
は、父が最初さいしょに植えたもので



す。父は、町に千本の桃を植えようと、流しびなの館や用瀬町内の公共施設の周りや友人の家に苗木を配って回っていました。しかし、八百五十四本をプレゼントとして、残念ながらなくなってしまいました。十四年間に八百五十四本育てたのでした。

桃の町をめざす父の姿を見てきた私は、父がなくなっただけで、「よし、父が目標にしていた桃の木千本を達成しよう。」と決めました。そして、今もこうして桃の木を育てているのです。父の後を引き継いで十四年目になります。二人で足かけ二十八年です。あと十本で千五百本になります。どんな植物も、ただ植えるだけでは、りっ



ぱに育ちません。時々見に行つて、虫が付いていたら消毒をしたり、斜めに曲がつて育つていたら、そえ木をして真つすぐにしたりします。大きくなった桃の木の花を見て、みんなが幸せな気持ちになつてくれればうれいなあとと思います。「今年もまた、ええ花が咲いたなあ。来年もまた、花が見たいなあ。用瀬小学校へ春に行つたら桃の花が見えるなあ。あの花は、私たちの町の花だ。」と思ひだしてくれたら、うれしいです。



来年もさ来年も桃の木は花を咲かせることでしよう。大人になつて花を見て、ふるさとを思い、ふるさ

とを忘れない、そんな子どもに育ってほしいと思います。そして、ふるさとを堂々と語れる大人になってほしいと思います。父も口ぐせのように、

「孫たちにこういう足あとを見せて、後世に役立つことを考える人になってほしい。」
と言っていました。

学校には桃の木が、たくさんあります。全部で何本か、数えてみてください。その一本一本にどんな気持ちが入められているか、考えてくれたらうれしいです。

(用瀬小学校 自作)



参考資料

わが桃源郷の始まり 西村良夫

盛岡タイムス 平成一一年九月二五日

新日本海新聞 平成一七年二月二八日

平成一八年五月八日



【桃の木物語 西村良夫】

一 ねらい

桃の木を一本一本植えていったおじさんの気持ちを考えることを通して、地域の人に感謝の気持ちを持つと共に地域を大切にしようとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・西村良夫さんは、二八年間父と自分で地域に桃の木を無償で植え続けている人である。その継続的努力で町内の道には桃の木が植えられ、町の個性である「流しびなの里」として有名になっている。今でも継続的に世話をし続け、伝統や文化は人が形成し、人が心を受け継ぎ、発展させていくものであることを姿で示されている。

・資料の人物は、学校にも度々来校され、身近な人物である。地域にどのような思いを持っているか、直接話を聞くこともできる。児童は、地域で何気なく生きているが、郷土のためにできることをしようと活動している人となつながらことを通して郷土を誇る気持ちと、郷土に感謝する気持ちを育ませたい。

三 参考資料 わが桃源郷の始まり 西村良夫

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、二人の桃の木おじさんの気持ちを中心に話し合う。</p> <p>○お父さんが、桃の木を植えようと思ったのは、どんな気持ちからでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・花のあるきれいな町だとみんな喜ぶだろう。 <p>○どんな思いで、西村さんは、父の活動を引き継いだのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命も引き継がれるし、気持ちも引き継がなければならぬ。 <p>◎桃の木一本ずつには、どんな気持ちが込められているでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・故郷を思い木を育てている人などに感謝したい。 ・故郷のことをもっとよく知りたい。 <p>2 学習を振り返り、学んだことを話し合う。</p> <p>○大切にしたい故郷のことは何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行事に参加して人と関わりたい。 ・昔の様子を聞いて自分も伝えていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・買った木ではなく、木から育て、命をつないでいることを押さえる。 ・28年間二代に渡って植え続けている気持ちを話し合うようにする。 ・故郷に根付いている行事や料理を事前に体験させ、したことを想起させながら考えさせたい。 <p>※故郷を大切にすることについて自分の考えを持ち、話し合っている。</p>

すいせんの里

百谷ももだに

松本まつもと

貞義さだよし

毎年、春になると、ここ鳥取

市百谷は黄色とピンク色でいっぱいになります。ダムに植えられたすいせんとそのまわりのさくらがつくり出す美しいけしきです。村の人たちは、きれいなすいせんとさくらでお花見をするのをとても楽しみにしています。



松本さんは、百谷で生まれ育ちました。子どものころ、村の友達といつも家の近くで遊んでいました。きれいな川があって、美しい山がすぐ近くにある百谷の

自然が、松本さんは大好きでした。百谷は松本さん自
まんの村でした。

しかし、一九七四年（昭和四十九年）ごろ、百谷に
ダムができました。ダムをつくるために、百谷の村の
半分の人が村を出ていかなくはなりませんでした。
松本さんが子どものころからなかよしにしていた友人
も何人が引っこしてしまいました。松本さんは、引っ
こさずにすみましたが、自分の家のすぐ前までダムに
なっとうめたてられてしまいました。

ダムをつくるのにトラックが通ることができるよう
な広い道ができました。百谷の人にとってはべんりな道
でしたが、その道の近くには、ぼろぼろのふとん、さび
た自転車、きたなくよごれた空きかんや空きびんなど

たくさんのごみがすてられるようになってしまいました。百谷で生まれ育った松本さんは、ごみだらけのダムを見るたびにかなしく暗い気持ちになるのです。

「なんとかしたい。わたしの大事なふるさとなのに……。」

そう思い続けて何年かたちました。松本さんは仕事をやめたのをきっかけに、自分の住むこの百谷をきれいな村にかえようと決心しました。どんなことをすればよいか思いつきません。

「何をしたらいいだろう。ここを通る人たちがきれいだなと思うてくれるようなこと……。村をはなれた人たちが百谷に帰ってきたときに、うれしい気持ちになれるようなことがいいな。」

ダムをつくるために、ふるさとをはなれなければならなかった友達のことを思い出しました。

「そうだ、花を植えよう。すいせんの球根を植えよう。」
松本さんは、その人たちのためにも美しい百谷をとりもどそうと思いました。いつまでもふるさとを大切にしようために。

村の人たちにも球根植えをよびかけたかったけれど、みんないそがしそうでした。お金もうけになることでもありません。松本さんは、自分一人ががんばってみることにしました。

米作りのかたわら、すいせんの球根を植え始めましたが、かんたんではありませんでした。うめ立て地だったため、くわやスコップを入れると、大きな石がゴロ

ゴロと出てきて、なかなかあなをほることができません。たった一つ球根を植えるのも大変でした。でも、松本さんは、きれいな花をさかせるよと話しかけながら、一つ一つていねいに植えていきました。

次の年の春、すいせんがさくらの花とともに美しくさきました。松本さんは、よかったなあとはっとしました。次の年には、前の年より百こ多く球根を植えました。その次の年にもまた百こ多く植えました。こうして、松本さんは毎年毎年、百谷にすいせんの花をふやしていきました。そうして少しずつ、昔の百谷がもどってきていました。

しかし、それから十年後。夏から秋にかけて、すいせんの花がめちやくちやにあらされることが続きました。

た。イノシシのしわざでした。イノシシは、好物のミズをさがして土の中をさぐるのです。かなりの数の球根が土からほりおこされ、せつかく根付いていた球根がだめになってしまいました。このままでは、春になってもすいせんの花はさきません。

松本さんは、あわてて球根を植え直しましたが、次の日もまた次の日も、イノシシは球根をほりかえしていきました。松本さんは、あらされたすいせん畑を直しながら考えました。イノシシは、一回来たところに何回でもやって来る。いつまでこんなことを続ければいいのだろう。もうやめてしまおうか。

「また、イノシシにやられるで。」

「もう球根を植えるのはやめときんさいな。」

村の人も松本さんを気のどくに思つて声をかけました。

でも、松本さんは、風にゆられながらきれいに花をさかせていたすいせんを思い出すと、やっぱり植え直すにはいられませんでした。そして、すいせんを植えたときの気持ちを思い出しました。自分のふるさと、百谷をきれいな村にしたい、みんなが大切にする百谷にしたい……。

松本さんは、イノシシがくるたびに球根を植えなおし続けました。それだけではなく、今までと変わらず百この球根を新しく植えていきました。

松本さんが、すいせんの球根を植え始めてから四十年がたちました。

ダムにごみをすてられることは、もうすっかりなくなりしました。百谷のダムには、春には見わたすかぎり

いっぱいすいせんがさいています。その美しさがひょうばんになり、百谷のすいせんを見るために遠くからわざわざかしきりバスが来るほどになりました。

来年もまたその次の年も、百谷には黄色いすいせんの花がいっぱいにさくことでしょう。松本さんは、ねがっています。十年後も五十年後も百年後も、百谷にすいせんの花がさき続けていること。そして、そのすいせんを見て人々が笑顔になってくれることを。

(稲葉山小 自作)



【すいせんの里 百谷 く松本貞義く】

一 ねらい

約三十年間も水仙を植え続ける松本さんの生き方を考えることを通して、ふるさとを思い、大切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、百谷のダムに水仙の球根を植え続けている松本貞義さんについての資料である。ダムができてから、誰が捨てたか分からない自転車や布団等の粗大ごみが捨てられていた。百谷で生まれ育った松本さんの心は痛み、何とか昔の美しい百谷の姿を取り戻すことはできないかと考えた。そして、仕事を退職したことをきっかけに水仙の球根を植え続けることにし、今でも水仙の球根を植え続けているという話である。

・なぜ松本さんが何十年もこのような取り組みを続けておられるのか考えることにより、ふるさとがいつまでも美しい所であることを願いつづけている気持ちやふるさとが汚されていくことに悲しみや怒りを感じ、自分のふるさとを守らなければならないと行動した気持ちに共感させたい。

三 展開例

学習活動 ○主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料「すいせんの里 百谷」について、話し合う。</p> <p>○百谷に捨てられた自転車や布団を見て、松本さんは、どんなことを考えたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私の大切なふるさとに何てことをするんだ。 ・ダムができたせいで、ごみが増えて悲しいな。 <p>◎いのししにあらされても、なぜ松本さんはすいせんにを植え続けるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絶対に自分のふるさとを汚されたくない。 ・いつまでも美しい百谷であってほしい。 <p>2 自分の住んでいる地域について考える。</p> <p>○自分の住んでいる地域（ふるさと）で、もっとここがこうだったらいいなと思うことはありませんか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公民館を使った後、片付けをしていない人がいるので、困ります。 ・公園にごみがよく散らかっているの、何とかしたいです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当時の百谷にごみが捨てられていた様子が分かるように、不法投棄されたごみの写真を提示する。 ・自分の住んでいる百谷を何とかしたいと思う気持ちに共感させる。 ・すぐに考えることは難しいので、下校時や放課後を使って事前に考えるようにしておく。 ・自分だったらどうしたいか考えさせ、本時のねらいにより迫っていく。

貝がら節ぶしの先生
鈴木すずみどり

七月のある日、たんにんの先生が、

「来週から、運動会でおどる貝がら節の練習をします。

みんな、一生けんめい練習しましょう。」

とおっしゃいました。いよいよ、私わたしたちも貝がら節を

おどるんだと思いました。一年生いちねんせいのときからずっと、

上学年じょうがくねんがおどる貝がら節を見てきました。おそろいの

青いあおはつぴにこしみのをつけて、全員ぜんいんがいきをそろえ

ておどるすがたはすぐくかつこよくて、私も早くおど

りたいと思ってきました。

浜村はまむら小学校では、毎年の運動会うんどうかいで、四年生よねんせい以上の全

員いんが浜村はまむらに昔むかしから伝わつたわっている貝がら節がらぶしをおどりま

す。四年生よねんせいは初めておどるので、練習れんしゅうは夏休なつやすみみ前まへから

始はじまります。貝がら節がらぶしおど

りを教えてくださるのは学

校がっこうの先生せんせいではなく、鈴木すずみ

どり先生せんせいといって浜村はまむらの駅えき

前まへできつさ店みせをけいいえいしておられる方かたです。おいそ

がしいであろうに、平成十年へいせいじゅうねんごろから、浜村はまむら小学校しょうがっこうで

貝がら節がらぶしを教おしえてくださっているのです。

鈴木先生すずきせんせいが子どものころは、地ちいきの春祭はるまつりりやぼん

おどりなどで大人おとなや先まばいがおどるのを見みながらお

どっていて、自然しぜんにおぼえたということでした。でも、

今は貝がら節がらぶしをおどることも少すくなくなり、私わたしたちが貝

がら節がらぶしをおぼえることはなくなってきました。大人おとなの

中なかにも、貝がら節がらぶしをおどれない人はたくさんいるとい

うことです。



鈴木先生は、浜村に温泉旅館やホテルが少なくなり、

先生にほめられると、

貝がら節もおどられなくなっていく中で、小学校が浜村の伝とうである貝がら節を受けついでくれるのはうれしいことだと考えて、浜村小学校での指どうを引き受けたということでした。私のお兄ちゃんもお姉ちゃんもいとこも、鈴木先生に貝がら節を習ったと言っていました。

いよいよ、私たちの練習が始まりました。鈴木先生は、とてもていねいに、

「みくぎ、ひだり、一、二、三。」

と言いながら、ゆっくりとお手本を見せてくださったり、

「足の運び方が、上手になったね。」

などとほめてくださったりしながら、やさしく教えてください。いきいきと笑顔で教えてください。鈴木

「よし、もつとがんばって上手になるぞ。」

と思います。貝がら節おどりの練習をいやがっていた何人かの男子も、鈴木先生にはげまされて、今は一生けんめいに練習するようになりました。でも、練習が少し進んだ夏休み前は、とてもつらかったです。体育館はすごく暑くて、少しおどっただけであせが流れてきます。

立っているのもつらくて、少し練習したらすわりこみたくなってしまう。鈴木先生は、あせをふきながら一生けんめいに教えてください。私は集中できません。初めのころの一生けんめいさはありません。鈴木先生や担任の先生方ははげましてくださいますが、がんばろうという気持ちにはなれませんでした。

そんなある日、私は家で何となく貝がら節の踊りを練習していました。すると、それを見ていたお母さんが、

「あなたたちは幸せね。浜村に昔から伝えられてきた

貝がら節をこうして教えてもらえるのだもの。お母

さんが育ったところには、よそに自まんできるよう

なこんな古くから伝わるおどりなんてなかったわ。

だから、お母さんはあなたたちがうらやましいわ。」

とつぶやきました。それを聞いた私は、はっとしまし

た。鈴木先生がずっと小学校で貝がら節を教えてくだ

さっているわけが分かったような気がしました。この

ときから、私は、それまでよりもっと一生けんめいに

貝がら節の練習をするようになりました。

運動会の日。私は、どきどきしながら貝がら節の順

番を待っていました。そして、とうとう、私たちの貝

がら節が始まりました。会場みんなが私を見ている

ように感じました。私は、今まで鈴木先生に教えても

らったことを思い出しながら、せいっぱいおどりま

した。足の運びをまちがえないように、目線に気をつ

けて、みんなとそろそろように、……。

「ヤンサーノエー ヨイヤサノサツサ」

最後の決めポーズをとって、私は、

思わず「ふうう。」と大きく息をは

いていました。

「ピッ」

先生のふえの合図で、たい場し

ていきました。私の初めての貝が

ら節が終わりました。会場中から

大きなはく手が起こって、私たち



をつつみました。私はうれしくなって、思わずえ顔になりました。ふと本部テントの方を見ると、鈴木先生が目にはハンカチを当てながら、大きくうなずいているのが見えました。「えっ、鈴木先生、泣いておられるの。」私は胸がいつぱいになりました。

（浜村小学校 自作）



【貝がら節の先生 く鈴木みどりく】

一 ねらい

鈴木先生が郷土を愛し守り続けていることを知り、貝がら節踊りの練習に対する「私」の気持ちの変容に共感することを通して、郷土を大切にしようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

- ・浜村地域に在住しておられる鈴木みどりさんは、子どもたちが大人になっても伝統芸能としての貝がら節に誇りを持ち続けることを通して、ふるさとを心の支えにしてほしいという願いを持ちながら、十数年前から本校で貝がら節踊りを教えてくださっている。その鈴木さんのふるさとの伝統を守っていくようにする生き方から、地域と関わることの楽しさや地域を愛することのすばらしさを感じることができると考えた。

- ・この期に、地域に伝わる伝統芸能のすばらしさとそれを守ろうとする鈴木さんの思いを資料化してその生き方に学ぶことで、自分の郷土に関心を持ち、浜村を愛する心情を高めることができると考えた。

学習活動 ○主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、主人公の気持ちについて話し合う。</p> <p>○体育館が暑くて練習に対してがんばろうと思えなくなった「私」は、どんな気持ちだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暑いし、めんどくさいな。 ・何回も練習したから、もういいや。 <p>◎「あなたたちがうらやましい」というお母さんの言葉を聞いた「私」は、どんなことを考えていたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貝がら節踊りは浜村の大切な踊りなんだ。 ・鈴木先生のおかげで、私たちは貝がら節を踊ることができるんだ。 <p>○鈴木先生の涙を見たときの「私」はどんなことを思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鈴木先生、ありがとうございます。 ・こんなに私たちのことを気にかけてくださっていたんだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・暑さや辛そうな友達の姿を見ることで一生けんめいになれない「私」に共感させる。 ・今までと変わったのはどんな気持ちからなのか具体的にどんなところが変わったと思うのかを問い、気持ちの変化が行動へと結びついていることを押さえる。 ・どうして鈴木先生が涙を流されていたのか、その思いに触れさせる。

皿まわしで元気な町に
く山本 勲く
いさお

「まわるまわる

皿がまわれば

みんなの笑顔も

まわりだす」



これは、散岐地区公民館の前にある石碑に刻まれた

言葉です。

散岐は、皿まわし健康づくりの里として有名ですが、
ずっと昔からさかんだったわけではありません。散岐
で皿まわしが始まったのは平成六年、それからずっと
続けられています。

山本勲公民館長は、学校の先生をしていたころ、冬
でも半そで半ズボンの登下校をすすめたり、陸上や水

泳で健康な子どもたち

を育てようとしていま

した。公民館長になつ

ても、なんとか地域の

人が、健康で元気に過

ごせないかと、毎日毎

日考えていました。



ある日、NHKのテレビ番組で皿まわしを見ている
と、「皿まわしは、バランスをとるために集中力がつき、
手先を使うので脳を良くする。子どもや高齢者の健康
づくりに良い。」と紹介されました。「これだ。」と山本
館長はひらめきました。



すぐに、テレビに出ていた九州熊本の人のところへ行き、様子を聞いたり、皿まわしの仕方を習ったりしました。

散岐にもどると、さっそく地いきの人々に声をかけてまわりました。高齢者を中心に四十人も人が集まり、皿まわしの会がスタートしました。

山本館長は、自身で皿まわしの練習にも力を入れ、何度も何度も皿を落としながら、練習をくり返しました。

まわせる皿の数もどんどん増えていき、八枚も一度にまわせるようになりました。山本館長の熱意が、周りに伝わって、高齢者だけでなく小学生もみんなが夢中になって練習するようになっていきました。

平成九年、境港で行われた「夢みなと博覧会」に河原町代表として出演したところ、テレビで流されて、大変な人気となりました。県内のあちこちで演技したり、皿まわしを教えたりするようになりました。所さんの番組「笑ってこらえて」にも、出演し、皿まわしについて話をしたり、演技を見せたりしました。

さらに、平成十四年には、国民文化祭の「ふるさとなんでも夢まつり・皿まわし競演会」が河原町民体育館で開かれて、大人と共に小学生たちも見事に演技を披露ひろうしました。山本館長を中心に活躍やくした「散岐の皿

まわしクラブ」の人々は、会場の大きな拍手につつま
れました。

こうして、散岐は皿まわしの里として知られるよう
になっていきました。

今も散岐小学校には、皿まわしクラブがあり、山本
館長の後を引き継いだ徳田節子先生の指導の下、地区
健康スポーツ大会や敬老会などに出演するなど、皿ま
わしの里の伝統を元気に受け継いでいます。

（散岐小学校 自作）



【皿まわしで元気な町に ～山本 勲～】

一 ねらい

ふるさと散岐のあたらしい伝統となった「皿まわし」への山本勲さんの思いを知ることを通して、郷土を愛する心を養う。

二 資料選定の理由

・皿まわしは、児童にとっても皿まわしクラブがあったり、校内皿まわし体験教室があったりとなじみのある活動である。その皿まわしを散岐で広め、発展させた山本勲さんの取り組みをとおして、皿まわしの起こりを知り、ふるさと散岐に愛着を持ち、伝統を守ろうとする心を育てる。教員時代には、散岐小学校の陸上競技、水泳競技で全県的に名前を知られるようになるほど、小学生の体づくり、健康づくりをされてこられた山本勲さんは、保護者や祖父母にもよく知られていて親しみを持てる人物資料である。

三 参考文献（WEB）

- ・内閣府経済社会研究所「わが町元気情報」
- ・県とつとり暮らし支援課「地域の宝・地域力事例」
- ・とつとり市報 二〇一〇年三月号

四 展開例

学習活動 ○主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読んで話し合う。</p> <p>○毎日毎日考えていたときの山本館長の気持ちはどんなだっただろう。</p> <p>○山本館長は、「これだ。」とひらめいたとき、どんなことを考えたのだろう。</p> <p>◎みんなが夢中になって練習する姿を見て、山本館長はどんなことを思っただろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなが熱心に取り組んでくれてうれしい。 ・今までやってきて良かった。 ・これからもずっと取り組んでほしい。 <p>○散岐小学校の子どもたちが皿まわしを受け継いでいることをどう思いますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・何とか元気になる方法がないかと悩んでいる気持ちに共感させる。・ひらめいてからの行動を押さえることをとおして、見つけた喜びを考えさせる。 ・町の人々が、元気に取り組む姿を見て良かったという思いに共感させるだけでなく、人々にとっても良いきっかけになったことにも気づかせるようにする。 ・伝統は自分たちでつくっていくものであるということにも気づくようにしたい。 <p>現在の様子についても手紙に書けるようにする。</p>

小学校

◆ 高学年

音楽に一生を捧げた人生〜岡野貞一〜

阪神淡路大震災、東日本大震災……

いく度も大きな災害が日本をおそった。多くの尊い命がうばわれ、住み慣れた町は消えさり、多くの人が絶望の中に落とし入れられた。



そんな被災地で、最もよく歌われた歌がある。最後に残った希望と望郷の念（ふるさとを思う気持ち）を温かく包むように、その旋律に、その歌詞に多くの人が涙した。

「うさぎ追いしかの山 小ぶなつりしかの川……」

この歌詞で始まる名曲『ふるさと』の作曲者こそ、岡野貞一その人である。

岡野貞一は、明治十一年、現在の鳥取市古市に生まれた。祖父母は、武家出身の家柄だったが、決まった仕事はなく、くらしは苦しかった。貞一は、両親と姉の一家四人で小さな家に住み、質素な生活の中で、お互いに助け合い励まし合ってくらしていた。

貞一は、意地悪をしたりわがままを言ったりすることがなかった。で、「貞ちゃん、貞ちゃん」と呼ばれ、だれからも好かれた。小学校に上がってからも、成績は県の優秀賞に選ばれるほどよかったが、決して朝から晩まで机にしがみついて勉強ばかりの点取り虫ではなく、学校から帰ると家の手伝いをする心の優しい少年だった。

貞一は小学校を卒業後、成績もよくがんばったので、上級学校である高等小学校に入学した。学校の中には今の図書館にあたる久松文庫が開かれていて、貞一はよくそこへ行っては勉強した。家ではとても買ってもらえそうにないいろいろな本がたくさんあったからだ。

このころの貞一には楽しみがもう一つはあった。それは、数年前から教会に勤め始めた姉について、教会へ行くことである。教会では、外国人の牧師さんの話の後、オルガンに合わせて、賛美歌を歌った。貞一は、歌うのは楽しみだったが、それよりもオルガンの音がとても好きになった。そして、その音色を聞いているうちに、大きくなったらオルガンを習って、上手に弾けるようになりたいと思った。

ある日、教会へ行くと、自分より四つ五つ上の男の子が外国人の牧師からオルガンを習っているのを見た。その男の子は、

貞一の友達の兄の永井幸次^{こうじ}だった。椅子に腰かけ、しばらくその練習を見ていた貞一は、自分もオルガンを練習しようと思つた。

「何か賛美歌を伴奏するから、君、歌つてみたまえ。」

気安く話しかけてきた永井のそばで楽譜^ふを見て歌い始めた貞一は、ますます音楽がすばらしいものに思われ、興味を持った。

高等小学校を卒業した次の年、貞一十四歳の頃、鳥取市で「音楽教育の大切さ」についての講演会が開かれた。講師は、鳥取市に隣接する八頭郡出身の理学博士で、東京音楽学校長でもあつた村岡範^{はん}為^い馳^ち氏^しであつた。この講演を聞いて心を動かされた高等小学校の田村虎蔵^{とらぞう}と倉吉の林重浩^{しげひろ}、さらには、貞一の先輩である永井も東京音楽学校へ入学した。当時、鳥取から一度に三人も東京音楽学校に入学したというので話題となつた。

このこともきっかけになり、貞一もオルガンを弾けたり歌が上手になつたりしたいという気持ちから、自分も音楽専門の学校へ進みたいと強く思うようになった。

このころ、岡山の教会で勤め始めた姉の勧めで、貞一は岡山の学校に通いながら教会の仕事をする事になった。

明治二十六年三月、十五歳の貞一が鳥取を離れる日が来た。

母は目に涙をいっぱい浮かべていた。

「水が変わるから、けつしてなま水だけは飲まんようになあ。」あまり胃腸が丈夫でなかった貞一を心配した母の言葉だった。

こうして久松山を眺^{なが}め、そのふもとで学んだ高等小学校時代に思いを馳^はせながら、岡山へと旅立つた。

その後、岡山での入学試験準備では不十分だと考えた貞一の姉は、東京に行かせ勉強させることにした。東京についた貞一は、先輩^{せんぱい}である永井を訪れた。当時永井は東京音楽学校四年生になつたばかりであつたが、快く一緒に生活することを承知してくれた。貞一はこの時、同じ鳥取の人のありがたさを身を持って感じた。

そのころ、永井はオルガンの演奏が得意だつたため、本郷の中央教会に通つていた。この教会のパイプオルガンの音色は、貞一にとって母や姉と離れて生活しているさみしさや受験勉強の大変さを忘れさせてくれた。

明治二十九年九月、貞一は晴れて東京音楽学校に入学した。音楽を志し、鳥取を離れてから三年間が過ぎようとしていた。東京音楽学校ではすばらしい演奏や音楽にたくさん触れることができ、勉強しようという気持ちが一層高まつた。

明治三十三年、貞一はめでたく卒業を迎えた。音楽の才能に

加え、まじめに一生懸命努力したので、卒業成績はもつとも優

れていた。先輩の永井の勧めもあり、研究科に残り、一層勉強を重ねるとともに、授業補助として、先生の代わりに音楽を教える人になり、オルガンと唱歌を受け持った。夢がかなって東京音楽学校の先生になったのだ。

永井とともに通った本郷の中央教会は、東京でもっとも歴史のあるすばらしい教会だった。先生になった貞一は、数年後この教会のオルガニストとなり、毎週日曜日にその役をつとめた。

貞一は、まじめできちんとした教え方や、生徒に一生懸命やることの大切さを身を持って示したことが認められ、二十八歳の若さで助教授となった。そして、その翌年から文部省唱歌をまとめる仕事や師範学校や高等女学校の音楽の先生の講習会の講師など、わが国の音楽教育でもっとも大切な仕事を受け持った。

文部省唱歌を作る仕事を任された貞一は、ここである一人の人物と出会う。長野県出身の国語科の高野辰之教授である。

そんな高野氏がある日、二つの歌詞を貞一に渡した。

「うさぎ追おいしかの山 小ぶなつりしかの川……」で始まる『ふるさと』と「菜の花ばたけに 入日ひうすれ……」と始まる『おぼろ月夜』である。

目を通した貞一は、今すぐにでもメロディーが浮かんできそうなほど強い感動がわいてきた。それは鳥取での少年時代の思

い出がありありとよみがえってきたからだ。

しかし、自分のふるさと鳥取の思い出だけをもとにして作曲するのではなく、高野教授のふるさとである長野県豊田村とよたむらの様子についてもいろいろと尋ねてみることにした。話し合ううちに、自分達のふるさによく似たことが多いことが分かった。

鳥取にも長野にも美しい山があり、清らかな川が流れ、目にあざやかな黄色い菜の花畑や広々とした美しいれんげ畑がある。そればかりではない。高野教授は文学を、貞一は音楽を目指して、それぞれ道は違っても、志を立て東京で勉強しようとしたことも同じであった。

このようにお互いの気持ちを通い合わせた作詞者と作曲家、少年時代を美しい自然の中で過ごした二人が作り上げたのが、名曲『ふるさと』であった。この他にも二人で作った「日の丸の旗」「もみじ」「春が来た」「春の小川」は百年以上たった今でも歌われている。

貞一が教授になった大正十三年、この年三十年ぶりに懐かしなついふるさと鳥取に帰った。きっかけは、鳥取市の高等女学校の校歌の作曲を頼まれたことだった。もらった作詞を読んでいるうちに三十年前の少年時代のことが思い出された。今の鳥取の様子はどうなっているのか、自分が遊び学んだ久松山のふもと

の景色や感じは変わっているのか、その様子をぜひ見てみたい。そんな思いになった貞一は、夫人と九歳になる長男をつれ、帰郷することになったのだ。

鳥取駅に着き、高等女学校へ向かう途中、若桜街道がにぎやかで活気があるのにおどろいた。

「若桜街道がずいぶんとにぎやかになったのですね。」

「そうです。駅が若桜街道の南の終点にできたからでしょうね。」

しかし、若桜街道から見える久松山の姿は全く変わらなかつた。久松公園、お堀の松もそのままだ。高等小学校の頃が懐かしくよみがえった。お堀のハスの葉で遊んだことも、ついこの前のように思われた。

その後、家族で砂丘に行った。スリバチの上まで行くと、長男が大声をあげてはしゃいだ。貞一も子どものように素足になり、砂の上に寝転んだりして、砂の感触を楽しんだ。

そして、目の前に遠く広がる日本海や空高く流れる雲を見ながら、しばらく思いにふけた。三十年ぶりに鳥取の地に浸った貞一であった。この時彼の心の中に「ふるさと」の旋律が繰り返し流れていた。

五十歳をすぎ、音楽学校を退職してからも、作曲専門の学科の講師を担当したり、日本教育音楽協会の役員をつとめたりと、

わが国の音楽教育の発展のためにいろいろな仕事をやり遂げていった。

昭和十六年自分を音楽の道に進めてくれた恩人である姉の夫の危篤に、風邪気味な体調を無理をして岡山まで行ったことがもとで急性肺炎を起こし、十二月二十九日に息を引き取った。時に六十四歳だった。

「では、最後にみんなで『ふるさと』を合唱しましょう。」

今日も日本のどこかで、貞一が作った『ふるさと』が流れ、歌われる。

作られて百年以上もなるこの曲がどうして多くの日本人の心を癒し、希望の灯となるのか。きっと貞一が作り出した優しく穏やかな旋律が人々の痛みを包み、そしてそれぞれの心に望郷の念を生むからに他ならない。

「志を果たして、いつの日にか帰らん」

生涯東京での生活が長かった貞一だが、心はいつでもふるさと鳥取に帰っていた。

(修立小学校 自作)

【音楽に一生を捧げた人生く岡野貞一く】

一 ねらい

今なお日本中で「ふるさと」の歌が歌われているのかを考
えることを通して、郷土を愛そうとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・鳥取市が誇る日本を代表する作曲家である岡野貞一は、明治四十二年から大正三年にかけては文部省唱歌編纂の国家的大事業に関与し、多くの名曲を誕生させた。中でも「ふるさと」は今でも歌い継がれ、被災された人々の心を優しく包んでいる。

・日本中に歌われている名曲「ふるさと」を作曲した岡野貞一は、鳥取市が生んだ偉人である。氏の生い立ちや生き方について知ることを通して同郷であることを誇りに思うと同時に、氏が曲に込めた「ふるさと」鳥取への思いを考え、郷土を愛する気持ちを育てたい。

三 参考文献

- ・『鳥取県子どものための伝記 第二巻』
- ・『鳥取市人物誌きらめく一二〇人』

四 展開例

学習活動 ○主な発問 ・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読んで話し合う。</p> <p>○心に残ったところはどこですか。なぜそこが心に残ったのですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・故郷を思いながら作曲した場面 ・久しぶりに鳥取に帰って砂丘に行った場面 <p>○久しぶりに鳥取に帰って来た貞一はどんなことを思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やっぱり故郷はいいな ・この自然を大切にしたい <p>◎どうして今なお、日本中でこの「ふるさと」の歌が歌われるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとを思う気持ちを歌っているから ・だれの心にもある故郷に帰りたいたいという気持ちが分かるから <p>2 岡野貞一について考える。</p> <p>○岡野貞一と同じ鳥取に住む一人としてどう思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本中に愛される曲を作った岡野貞一と同じ故郷であることを嬉しく思うし、これからも郷土を大切にしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・心に残った場面を聞くことで、岡野貞一の生涯をまとめさせる。 ・曲「ふるさと」が郷土を愛する気持ちと重ねることに気づかせる。 ・岡野貞一を誇りに思うとともに、これからもこのふるさと鳥取を大切にしていこうとする気持ちにつなげる。

夢に向かって走り続ける
〜野人 岡野雅行〜

一九九七年十一月十六日ワールドカップフランス大会最終予選、日本代表チームはイランとの一戦を迎えます。日本が勝てばワールドカップへの出場が決まります。それまでの四十年間、日本は一度もワールドカップに出場することができませんでした。日本は、イランと二対二で引き分け、延長戦にもつれ込みました。日本中の人々がかたずを飲んで見守る中、延長戦後半残り二分で日本はシュートを決め、歴史的勝利を収めたのです。そのゴールを決めたのが、岡野雅行選手でした。



岡野さんは、六歳のころからサッカーを始めました。最初は、サッカーをしたくて始めたわけではなく、人見知りでなかなか遊び相手ができなかった岡野さんを、母親のたみ子さんが強引に地元のサッカーチームに入れたのでした。しかし、サッカー

を通して友達ができたことがうれしくて、どんどんサッカーを好きになっていきました。そして、小学校三年生のころにはプロサッカー選手を夢見るようになりました。学校が終わると、ランドセルを家に投げ出し、公園やあき地で友達とドリブルの練習をしたりゲームをしたりしました。家に帰っても、ボールをけって遊び、いつもサッカーのことで頭がいっぱいでした。当時は、まだ日本にはプロのチームがなかったため、学校の先生にもサッカー選手になることをあきらめるように言われたこともありました。思いは変わらず、卒業文集にも「サッカー選手になる」と書きました。

高校進学の時です。ここで、岡野さんは大きなかべにぶつかりました。サッカー部があると聞いて入学した高校に、サッカー部がなかったのです。専門の指導者もおらず、だれにもサッカーを教えてもらえませんでした。岡野さんは悩みました。そして、ある決断をしました。岡野さんは高校の理事長にかけあいサッ



カーのできる環境を整えてもらうことにしたのです。また、同級生に熱心に呼びかけ、部員をそろえたりもしました。しかし、ほとんどがサッカーの経験のない素人チームです。部員のやる気は薄く、岡野さんが一生懸命考えた練習メニューにもまじめに取り組みません。行う試合では連戦連敗。部員はさらにやる気をなくしていきます。そんなある日、岡野さんは、泣きながら、こう言いました。

「へたくそでも、やるっていうのがサッカーだ。これは、サッカーじゃない。キャプテンをやめます。サッカーもやめます。」
ちんもくが続きました。すると、ある先輩が、口を開きました。

「悪かった。ちゃんとやるよ。みんなももう一度、ちゃんとやるうで。」

それから、チームは変わっていきました。日が落ちても練習するようになりました。初めは、十四対〇だったチームが、十対〇になり、八対〇、四対〇、一対〇、ついに〇対〇になると、みんなで抱き合って喜び合いました。ほとんど素人だったチームは、県大会で三位にまでなりました。

大学進学後、Jリーグの浦和レッズに入団した岡野さんは、日本代表にも選ばれました。そして、あのワールドカップ予選の

歴史的ゴールも生まれ「野人 岡野」として有名になりました。年間三十五試合も出場する活躍を見せ、名実ともにトッププレイヤーの仲間入りをしました。その後十年間、第一線で活やくし、多くの一流選手としのぎをけずりました。その間に、プロとしての姿勢やプロの厳しさを学び、身につけていきました。

しかし、勝負の世界は厳しく、いつまでもトップで活躍することはできません。じよじよに試合に出場する回数は減っていき、二〇〇八年には、わずかに四試合しか出られなくなりました。そして、とうとう引退を迫られるまでになりました。

それでも岡野さんは、自分がプレーできるチームを探しました。そこで出会ったのが、「ガイナーレ鳥取」です。二〇〇九年八月三日、岡野さんはガイナーレ鳥取に入団しました。当時、ガイナーレ鳥取は、Jリーグではなく、その下のJFLでJリーグ昇格を目指しているチームでした。「チームをJリーグへ」岡野さんの新たな挑戦が始まりました。



岡野さんは、若いチームの一人一人にプロの厳しさを教えていきました。どの選手よりも体を張ってボールに向かっていき、「最後まで勝負をあきらめない」という姿勢を何度も何度も試合の中で見せ、さらに、選手に話して聞かせました。そんな岡野さんの情熱が選手達を大きく変えていきました。そして、岡野さんが入団して二年。JFLで優勝し、Jリーグに上がるこ
とができました。

岡野さんの次の目標は、ガイナーレをJリーグで優勝させることです。若い選手が育っていき、試合に出られないこともあります。しかし、どんな環境でも、どんな舞台であろうとも、決して力を抜きません。

「チームに負けが続いたり、練習が結果に結びつかなかったりすると、逃げたくなるときもあります。しかし、苦しいとき、うまくいかない時こそ、前向きに練習を続けています。」

日本をワールドカップに導いた岡野雅行さんは、今も全力でプレーを続けています。
(醇風小学校 自作)

参考文献 「野人伝」 岡野雅行著 (新潮社)

参考資料 NHK 「道徳ドキュメント」

【夢に向かって走り続ける く野人 岡野雅行く】

一 ねらい

岡野選手が困難を乗り越え挑戦し続ける姿について話し合うことを通して、自分の夢に向かって努力し続けようとする心情を育てる。

二 資料選定の理由

・本資料は、数々の困難を乗り越えて栄光を勝ち取ってきたガイナレ鳥取の岡野雅行の生き方や思いを綴ったものである。ワールドカップに出場した選手であるが、学生時代はサッカー環境が整わない中で周囲に働きかけたり、引退を迫られたりする中でも夢を持って好きなサッカーをやり続けている人である。

・子どもたちに、あこがれとなる人の生き方に学び、挫折感や逆境を乗り越え、常にあきらめず努力し続ける大切さを感じさせたいと考えた。

三 参考文献・資料

「野人伝」岡野雅行著（新潮社）
NHK道徳ドキュメント

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、岡野選手の生き方について考える。</p> <p>○どんなところが心に残りましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生時代に周りのサッカー部の仲間に訴えたところ ・ガイナレ行きを決めたところ <p>○高校に入学してサッカー部がなかった時、岡野選手はどんなことを思ったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の力で何とか変えたい ・せっかくやれると思ったのに残念だ <p>◎なぜ、岡野選手は逃げないでプレーし続けるのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夢をあきらまない ・強い気持ちがあるから <p>2 岡野選手の行き方からどんなことを学びましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・困難があっても最後までやり抜く強い気持ち ・夢に向かって頑張り続ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・困難に直面した時の諦めそうになる気持ちと乗り越えようとする気持ちの間で揺らぐ気持ちを引き出す。 ・岡野選手が頑張り続けるわけについて考え、自分のことも振り返ろうとするきっかけを作るようにする。

アシックス創業者

鬼塚喜八郎おにづかきはちろう

平成十九年十一月。八十九歳で亡くなった男性のお別れ会が開かれた。別れを惜しんで全国から千六百人もの人が集まった。会場には、マリナーズで活躍中のイチロー選手、マラソンで活躍した高橋尚子選手などスポーツ選手を始め、多くの有名人の姿もあった。

動機は善なるや、私心はなかりしか

私が幼い頃から強く信じていることは、「他人を幸せにすれば自分も幸せになれる」ということで、そのことを祖父から学びました。祖父は坂口伝十郎でんじゅうじゅうじゅうといい、もとは小作人こさくじんでした。なかなかのやり手で、因幡和紙の仲買いをして財産を築きました。私は、五人兄弟の末っ子で、私が生まれたころはすでにいんきよの身で、小学校に上がる前の私をよんで、ひらがなを教えてくださいました。

その男性の名前は、鬼塚喜八郎おにづかきはちろう。スポーツ用品メーカー「アシックス」の創業者である。

そんなある日、まだ明治小学校低学年の私を近くの神社に連れて行ってくれたときのことです。いたずらざかりの私は、一枚のささの葉で小さな船を作って神社の手水所ちようすいじよにうかべて遊んでいました。するとおまいりをすませた祖父が、このいたずらをしからずにこう言ったのです。

大正七年五月二十九日
鳥取市松上（金原）に
生まれた喜八郎は、生

「いいかい、このささ舟を自分のところに引き寄せるには、手で水をかき寄せてはだめなんだ。反対に、水を向こうに押しやるようにするんだ。」

前、次のように 語っている。

そして、「ほらささ舟がこっちに来るだろう」とやって見せてくれたのです。なるほど、まねてみるとささ舟がこっちによってきました。おじいさんのその後の言葉が、幼い私の心に深く



朝日新聞 平成 18 年 12 月 7 日より

刻まりました。

「このささ舟のことは大事なことだからよく覚えておくんだ。

なんでも自分のものにしようと思っただけで自分の方に引き寄せてはいかん。そうでなく、向こうに押しつけてやればささ舟がこっちに来るように、自分のことより他の人のことを考えると、神様がおめぐみをくださるんだ。」

祖父が私に言いたかったことはまさに、

「他人を幸せにすれば自分も幸せになれる」

この言葉だったのではないだろうか。これまで生きてきた人生のなかでこの言葉がいつも私の心のどこかにあったのだと思います。

また、私の姓が「坂口」から「鬼塚」に変わったのも、祖父のそんな言葉が心の片隅にあつたからだだと思います。

私が鳥取一中（現在の鳥取西高校）を卒業して、兵庫県姫路市の陸軍に入ったときの戦友に上田さんがいました。同じ年でもあり兄弟のような親しい仲でした。一九四三年、ビルマ（現在のミャンマー）の戦いに行くことになりました。私は残った後の事を頼まれたのですが、上田さんが日本をはなれる前夜別れの盃をかわしました。そのとき、

「お前をみこんで、頼みがある。」

と、よくよく思いかねた様子で語りかけてきました。

「おれは、神戸の老夫婦、鬼塚家の養子になって死に水をとつてやる約束をしている。すまんが、おれにもしものことがあつた時は二人のめんどうを見てやってくれないか。」

「よし、分かった。」

私は、ふたつ返事で約束をしました。

彼が戦地に赴きしばらくしたある日、一通の手紙が届きました。

「上田さん、昭和二十年四月十一日ビルマにて戦死。」

そのことを知った私は大変ショックでしたが、それと共に彼と約束したことがすぐに思い出されてきました。いざ、現実のこととなると鬼塚氏老夫婦にはすぐには返事ができませんでした。考えに考え、これも天命ではないかと思いました。上田さんも天国から「坂口、頼むぞ」と言っているような気がしてついに決心がつき、「養子にならせていただきます」と言ったのです。

私は、天命をプラスに受け止めました。「年老いた二人を支えながら、自分もこの神戸で新しい人生を築いていこう。」その気持ちのどこかに、「約束はぜったい守れ」というおじいさんの言いつけがあつたのも確かでした。つけ加えれば、「他人を幸せにすれば自分も幸せになる」というおじいさんの「ささ舟の教え」もあつたかもしれせん。

スポーツの理念からアシックスは誕生した

戦争が終わり、焼け野原となった神戸に出てきた私は、一九四九年「鬼塚」という会社を作りました。たむろしている青少年を見て、心を痛めていた私には、新しい日本を築くためにも、彼らを立派に育ててやらなければ、戦争で死んでしまった多くの友に申しわけないという強い思いがありました。

会社をつくる時、私の戦友の一人、堀公平ほりこうへいさんに相談したときに彼が言ったのが、「健全なる身体に……」という言葉だったのです。彼はこう続けました。

「鬼塚君、知・徳・体の三つをバランスよく育てて立派な社会人にするには、スポーツが最適だと思うんだ。」

なぜ、スポーツが青少年の育成に役立つのか。彼の説明は、とても分かりやすかったです。

「スポーツマンシップ 五か条じょう」

- 第一、スポーツマンはつねにルールを守る。
- 第二、スポーツは礼に始まり礼に終わる。
- 第三、スポーツマンはつねにベストをつくす。
- 第四、スポーツはチームワークを大切にす。
- 第五、スポーツマンはつねにベストをつくせるように努力する。

このように彼が書いてくれたのです。そして、続いての一言が私の人生を決定しました。

「スポーツを青少年にやらせたくても、今運動靴がなくなつて困っているんだ。お前、ひとつ靴屋になつてすばらしい靴を作ってくれんか。」

「よしつ、おれは靴屋になるぞ。靴屋になつて戦争で生きる氣を失い線路のガード下でたむろしている子ども達に夢を与える仕事をするんや。その仕事は俺がやらねばだれがやる。俺にしかできない仕事だ。」そう決心した私は、さっそく神戸市長田地区のゴム製造所を紹介してもらい、スポーツシューズ作りの修業しゆぎょうをしました。スポーツを通して青少年たちの心身を作る新しい日本の土台となつてもらおう。そのためシューズを作る仕事は、私に大きな生きがいを与えてくれました。現在も毎年入社式で、このスポーツマンシップ五か条を読み上げています。

この五か条は、社会人としての正しい道しるべになると信じるからです。



アベ選手の足を採寸する鬼塚氏
参考書籍「私心がないから皆が
活きる」より

鬼塚は、当時難しいと言われたバスケットシューズやマラソンシューズなど次々に誕生させた。マラソンの野口みづきがオリンピックで優勝した時、履いていたシューズにキスをしたのはあまりにも有名な話である。

今なお、鬼塚は、自身の作りあげた会社のスポーツシューズで多くのスポーツ選手を陰で支え続けている。

アシックス鬼塚喜八郎の「経営指南」 鬼塚喜八郎 著

(致知出版社) より

(明治小学校 自作)



アシックス創業者

鬼塚喜八郎さん プロフィール

- 一九一八年（大正七年） 五月二十九日、鳥取市松上（金原）に生まれる。
- 一九三一年（昭和六年） 明治小学校を卒業する。
- 一九三六年（昭和十一年） 鳥取第一中学校を卒業する。
- 一九四九年（昭和二十四年） 神戸市の自宅に、スポーツシューズ製造会社「鬼塚商会」をつくる。
- 一九五六年（昭和三十一年） 「オニツカタイガー」の製品が、オリンピックに参加する日本選手の手の特レーニングシューズとして使われる。
- 一九五七年（昭和三十二年） 「オニツカ株式会社」を設立する。
- 一九七四年（昭和四十九年） 世界のスポーツシューズ三大メーカーに成長する。
- 一九七七年（昭和五十二年） スポーツウェアのジイティオ、ニットウェアのジェレンクを加えて三社が合ぺい。
- 総合スポーツ用品メーカー「アシックス」と名前を改める。
- 一九九二年（平成四年） 「アシックス」の会長になる。
- 二〇〇一年（平成十三年） 国際オリンピック委員会から、長年にわたりスポーツおよびオリンピックの発展に貢献（こうけん）したことが認められ、オリンピックオーダーを受章する。
- 二〇〇五年（平成十七年） 日本バスケットボール協会会長になる。
- 二〇〇七年（平成十九年） 九月二十九日、心不全で亡くなる。享年八十九歳。

「アシックス創業者」鬼塚喜八郎

一 ねらい

鬼塚氏がスポーツシューズを作ろうと決意した気持ちを考えることを通して、自分がやろうと決めたことに対してくじけずに希望と勇気を持って取り組むことの大切さに気付かせる。

二 資料選定の理由

・今や世界的に有名なスポーツシューズメーカー「アシックス」の社長だった鬼塚氏は、終戦間もない頃、非行化する青少年たちに、何とか心身ともに正しく育ち新しい日本を背負ってほしいという願いで世界一のスポーツシューズを作ろうと決意した。そして、人も金もない苦しい生活の中から私心を捨てて人のために崇高な夢と目標に向かい自分の道を切り開いていった。

・人間だれしも決断や選択に迫られることがある。決断することというのは単なる思いつきではない。決断するということときには、結果についての全責任を自分で持つという決意と覚悟が必要である。価値判断の基準として自己中心的に考えようとする小学生のこの時期に、「指針がないから、皆が活きる」「他人を幸せにすれば自分も幸せになれる」という言葉の意味の重みを考えさせるとともに、「夢や希望を持つてくじけず頑張ることの大切さに気付かせたい。」

三 参考文献

・『アシックス鬼塚喜八郎の「経営指南」』

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み鬼塚氏がスポーツシューズを作ろうと決断に至った経緯を考える。</p> <p>○祖父の「さき船の教え」から喜八郎はどんなことを学んだのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことより、まず人のことをする人になろう。 ・人のために尽くそうとすることが大切だ。 <p>○終戦間もない頃はどんな様子でしたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことで精いっぱい。 ・人のことを助けるような余裕はない。 <p>◎スポーツシューズを作ろうと決断した喜八郎のことをどう思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いいと思うことに挑戦してすごい。 ・夢に向かって進んでいくところがカッコいい。 ・日本の国を本当に何とかしたいと強く思った人だ。 <p>2 鬼塚喜八郎の生き方を自分の生き方に重ね合わせてみる。</p> <p>○自分が決めた目標に向かってどのように頑張っていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標があると、くじけそうになる時に頑張れた。 ・自分が決めたことだから、諦めたくないので続けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとの約束を守り鬼塚家に養子に入った姿を考えさせることで人のために尽くそうとする喜八郎の優しさと律義さに共感させたい。 ・終戦後の物資が極度に不足して自分一人が生きるために精一杯の状況であることを理解させる。 ・自分一人の好みや金儲けだけを考えているのではないことを押さえさせる。 ・スポーツ精神が社会で生きていく上でどんなに大切か気付かせたい。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分が決めた夢や目標に向かって努力した体験を想起させ、その時の気持ちを出し合う。

わがものは社会のもの

寛雄平

鳥取立美和小学校

の校門近くに高さ
三メートルにも及ぶ
大きな石碑が建つて
います。この石碑に
は、とても大きな文
字で、寛雄平と書か



れています。また、下味野集落にも、同様な石碑があります。
寛雄平とは、どんな人物だったのでしょうか。

寛雄平は、江戸時代一八四二年に下味野に生まれました。
この当時日本は、天保の改革が始まり、倹約令や人返し令が出
されるなど様々な規制が行われるようになった時代でした。
雄平は、九歳のころには、神官小森一学について四書五経や
往来物の素読を学びました。記憶力がよく、同年齢の中で群を
抜いていました。将棋も強く、大人を負かすほどでした。

十三歳になったころ、河原村の塾に近郷の子ども達が数多く

学んでいるのを見て、父 橘五郎に

「父さん、私は勉強が好きです。他の人たちのように、塾で先
生について勉強をさせてください。」

と頼みました。しかし、その当時雄平の家は家計が苦しく、父は
「勉強好きなお前の気持ちはよく分かる。しかし、お前が働か
ないと家がたおれてしまう。勉強に励ませるゆとりはない。
農業に専念しなさい。」

と言われ、願いが許されませんでした。親思いの雄平はその思
いに従いました。

その後は、毎日、四、五人の作男達と共に、田を耕したり、そ
の裏作の麦や豆を四十俵もの収穫をあげたりするなどして働く
ようになりました。父の願いを自分の願いとし、家の繁栄に努
めました。

しかし、勉学への願いはあきらめきれませんでした。雄平は、
農業に励むかたわら、昼は常に経書を懐に入れ、牧牛の仕事の合
間に木に牛をつなげると、離れた原野で経書を読みました。夜
は炉の火の明かりで灰に字を書いたり、行燈のもとで昼間の読
書の続きをしたりするなど、一人勉学に努めました。

雄平は、三十四歳のとき、家を継ぎ、村人のリーダーとして

いろいろな社会公共の事業に力をつくしました。農林業だけではなく、教育にも、宗教にも力を注ぎました。

教育事業においては、たびたび教育資金の寄付をしました。明治十三年には学資金百円を、その後には、分教場建設資金として二百円を寄付するなど生涯を終えるまでに寄付した金額は、数万円（当時の一円が現代の二万円の相当することから、現代のお金に換算すると数億円）になりました。実に莫大な金額を寄付したことになります。

そして、全国のどこよりも先に、農繁期のうはんきに季節保育所を開設しました。当時、水田地帯の農繁期は長く、機械がないため、労働は厳しいものでした。朝、陽が上らぬうちから牛を追って田を起こし、田の中に水をはり、数十人の早乙女さおとめが手作業で、苗なえを植えていきました。昼の食事は、田のそばで食べ、星が輝きたすまで、村中総がかりで毎日、田の仕事を続けました。赤ん坊を、背中におんぶしながらの仕事でした。家にほうりつ放にされた幼い子たちは、行方不明になったり、川や池に落ち死んだりしました。そんな幼子をなくした親の姿を見ながら、雄平の心は悲しみでいっぱいになりました。「こんな悲しいできごとがあってもよいものだろうか。」と怒りと悲しみで考え込みました。考え込む雄平を見て姉が、



「考えてばかりいても、どうしようもない。お前が、村中の子どもをあずかり世話をするほかに、ええ工夫なんかあるものか。」と言いました。そのことばを聞いて、雄平ははつとしました。

「そうだ。子どもをひとところに集めて、守り役をつける。子ども達みんなで遊ばばいいことだ。」

考えが浮かぶと、すぐに村の庵寺あんでらへ行き尼あまさんに話をしました。そして、私財を投じて、庵寺を改造し、保育所を作り、遊具も備えました。明治二十三年に建物新築し「子どもあずかり所」の看板を掲げ、保育できる施設に整えられました。おか

げで、村の人々は、安心して農作業をすることができるようになりました。やがて、保育所は、子どもを預かるだけでなく、遊戯ゆうぎやしつけを学ぶ今の保育所と変わらない立派な姿になりました。

雄平の様々な業績を行う原動力となった考えは、「わがものは社会のも

の」という信念です。この信念のもと、その強い意志と実行力をもつてひたむきにやり遂げました。

(美和小 自作)

一八四二	鳥取市下味野に生まれる。
一八五四	労働しながら一人勉学に励んだ。(十四歳)
一八七五	家督を継ぐ。(三十四歳)
一八七六	村有原野開拓・造林事業に着手(三十五歳)
一八八〇	県に百円を献納(三十九歳)
一八八一	農村託児所の開設(四十歳)
一八九八	小学校に二百円寄付(五十七歳)
一九〇〇	農村託児所を新築し、「下味野子ども預かり所」の看板を上げた。(五十九歳)
一九〇九	自費で図書館を開設(六十八歳)
一九一六	亡くなる(七十四歳)

(注1) 四書五経……中国の古典で四書は『大学』『中庸』『論語』

『孟子』。五経は『易経』『書経』『詩経』

『礼記』『春秋』。

(注2) 経書……四書五経を略して経書という。

【わがものは 社会のもの く算 雄平く】

一 ねらい

算雄平のひたむきな生き方を話し合うことを通して、自ら進んで、公共のために役立とうとする心情を育む。

二 資料選定の理由

- ・わがものは社会のものという信念のもと、地域社会のために、農林業・宗教・教育などの公共の事業に力を注いだ。
- ・特に、全国に先駆け、農繁期に季節保育所を開設した。
- ・自主的な学びにより、様々な知識・技能を身につけ、公共のために進んで働こうとする心情を育む。

三 参考文献

- 「幼児教育」第六十九巻 岡部 茂
- 『風雪の鳥取砂丘』篠村 昭二
- 『鳥取県教育百年史余話』篠村 昭二
- 『郷土が誇る人物史』鳥取県教育委員会
- 「算雄平の託児所創設の時期に関する研究」広島女子大

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、話し合う。</p> <p>○塾で学ぶことを許されず、農業に専念するように言われたとき、雄平はどう思ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・しかたがないな。あきらめよう。 ・なんとかして、勉強したいな。 <p>○なぜ、何度も教育資金の寄付をしたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからは、農村の子どもも勉強しなければいけないと思ったから。 ・勉強する楽しさを子ども達に味わわせたいと思ったから。 ・自分が果せなかったことを、子ども達に実現させたかったから。 <p>◎活動の力となっているのは、何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことよりも、地域の人のことを考えている。 ・地域がよくなってほしいという強い思いを持っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・願いを許されなくても、あきらめない姿に学ばせる。 ・自分が果せなかった夢を地域の子どもたちには、叶えてあげたい雄平の思いに気づかせたい。 ・困っている人々の生活をよくし、地域の人々が幸せになってほしいという思いに共感させたい。

自分の意志で道を切り開く

〜女子走り幅跳び・岸本幸子選手〜



一九六四年（昭和三十九年）十月十日、第十八回オリンピック競技会が東京で開催された。アジアで初めてのオリンピックであった。日本が、世界に対し、敗戦からの復興と繁栄をPRする格好の場であり、日本中がわき立っていた。九十四カ国が参加した開会式当日、国立競技場は、満員の観客で埋めつくされた。その華々しい代表選手団四百三十七名の中に、鳥取県出身の岸本幸子がいた。

岸本幸子は、上味野で生まれた。幼い頃から、とても元気がよかった。小学生の頃には、姉や同じ村の子ども達と田んぼや畑を走り回り、日が暮れるまで遊んだ。特に熱中したのが、「石けり」であった。「石けり」というのは、輪の中に石を投げて、



片足とびをしながら前へ進む遊びであった。遊びながら体の平こう感覚と足腰のバネを養うことになった。また、かけっこが好きで、運動会の百メートル走ではいつも一番だった。江山中学校ではバレー部に入り、主力選手として活躍した。高校でもバレー部に入部したが、身長が

百五十四センチメートルと低かったため、陸上部に転向した。陸上部では、他の部員との実力の差があり、いつもとぼとぼと後ろを走っていた目立たない部員であった。

そんなある日、練習を終え、帰り支度じたくをしている幸子に、黄金泰子先輩こがねやすこが声をかけてくれた。

「雪の降る冬にこそ、こつこつと地道な練習を積み、基礎体力をつけることが、春からの大きな力になるよ。がんばろうで。」と励ましてくれたのである。そこで幸子は、雪が降る寒い中、腹筋、背筋、腕立て屈伸、縄とび、階段上りなど、毎日毎日苦しい練習に耐えた。秋までとは比較にならないほどの練習量だった。

二年の春になると、その練習の成果が表れ始めた。六月の中四国高校選手権で、五メートル二十四センチメートルで優勝し、七月の国体予選で五メートル四十四センチメートルの山陰新をマークした。この記録は、全国高校ランキング二位にあたる記録であった。

その活躍により、旭化成延岡という会社にスカウトされ、卒業後入社し、陸上部に所属した。毎日、仕事を終えたあとの練習の日々が続いた。三年間の努力が認められ、ローマオリンピックの選手候補に選ばれた。しかし、選手にとって致命傷である膝を痛めてしまい、オリンピック出場への夢は破れてしまった。

「オリンピックに出られないなら、もう引退しよう。体の小さい私には、いくら練習してもオリンピックに出ることは無理だ。」

とうとう練習をやめてしまい、仕事を終えた後、まっすぐ寮に帰る生活が続いた。

ある日、同じ会社の人との帰り道、

「幸子さん、幅跳びをやめてしまうの。」

と聞かれた。しかし、幸子は何も答えなかった。

「オリンピック出場にむけて幸子さんがひたすら練習する姿は、私達に、目標に向かって進むすばらしさを伝えていたの

よ。幸子さんは、私達の誇りなのよ。」

その日の夜、幸子は布団の中で考えた。

「やっぱり、私はオリンピックに出たい。でも、このままではだめだ。自分で道を切り開いていかなければ強くなれない。優れた技術を、自分から、学びにいく。」

そうして、日本を代表する幅跳びのコーチがいる日立（茨城）に移った。日本最先端の技術を学び、大学の先生の指導も受けた。その結果、これまでの跳び方とは違った新しい跳び方をマスターした。次第に記録が伸び始め、コンスタントに五メートル八十センチをマークするようになった。大会では、小さな体からは想像もできないほどの馬力あふれるスピードと、ダイナミックな跳躍でファンを引きつけた。「小さな大選手」とも言われるようになった。昭和三十五年、三十八年、三十九年の国体で優勝。日本選手権では、三十三年から三年間、連続制覇れんぞくせいした。さらに、三十七年のアジア大会では、五メートル七十五センチメートルで優勝した。

記録は伸び、さまざまな大会で優勝したが、オリンピックの出場資格となる標準記録・六メートルには、あと一歩のところでお

よばなかった。更新こうしんできない日々が続いたが、ついに、八幡やはた（北九州）で開かれた記録会の最後の六回目、六メートル〇七センチメートルを跳ぶことができた。その瞬間、十年間の苦労がいつきにふつとび、体から力が抜けていくような気がした。うれしさと同時に「やってきてよかった。」という思いが胸にあふれた。

いよいよ、東京オリンピックの開幕。スタンドには、祈るような表情でグラウンドを見つめる両親の姿があった。高校時代から特別なコーチにもつかず、黙々と一人で努力を重ねて「オリンピック出場オリンピックしゅつじやうの夢」を果した岸本幸子の姿が競技場で輝いていた。

（美和小 自作）



【夏季オリンピック年表】

- 第1回大会
1896年 アテネ大会
- 第17回大会
1960年 ローマ大会
(岸本さん24才のとき)
- 第18回大会1964年
東京大会
(岸本さん28才のとき)
- 第30回大会
2012年 ロンドン大会

【自分の意志で道を切り開く】

〈女子走り幅跳び・岸本幸子選手〉

一 ねらい

挫折しながらも、強い意志で、努力し続けた岸本幸子の生き方を話し合うことを通して、くじけずに、より高い目標に向かって、努力しようとする態度を養う。

二 資料選定の理由

・競技生活をするにあたり、今日のように環境が整っていない厳しい環境、さらに、体格のハンディもありながら、ひたすら練習に励み東京オリンピックという大舞台に鳥取県で始めて出場した人である

・決して恵まれた環境とはいえない境遇において、悩み・苦しみに打ち勝ち、自らの夢に向かい、行動する力を育みたい。

三 参考資料

「日本海新聞」一九八四年六月二十八日

「日本海新聞」一九八五年九月五日

「朝日新聞」鳥取県版 一九六四年十月一日

「毎日新聞」鳥取県版 一九六四年十月十日

写真アルバム「鳥取・因幡の昭和」

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、岸本幸子の生き方について話し合う。</p> <p>○雪の降る中での厳しい練習に取り組みながら、幸子さんはどんなことを考えたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つらいなあ。練習をやめたいなあ。 ・先輩のことは信じて、つらいけど練習しよう。 <p>◎ローマオリンピック出場の夢が破れたとき、幸子さんはどのように思い、考えたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・けがさえしなければ、出場できたのに。くやしい。 ・もうだめだ。引退しよう。 ・今やめたら、きっと後悔する。もう一度挑戦しよう。 <p>○東京オリンピックの開会式に、幸子さんはどんな思いで参加したのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あきらめないで、本当によかった。 ・支えてくれたみんなに、ありがとうと言いたい。 ・最高の舞台上、ベスト記録を出すぞ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やめたい思いと強くなりたい思いにふれさせる。 ・悩み・葛藤しながら挑もうという思いに至る心境を話し合わせる。 ・今までの努力が実り、あきらめずにがんばったことに満足している姿に共感させたい。

医学の発展にかけた生涯 〜下田光造〜



下田光造さんは、明治十八年（一八八五）に、河原町和奈見に生まれました。清らかな千代川と緑の山々に囲まれた美しい自然の中で、うなぎを取ったり山で遊んだりしてのびのびと育ちました。

その後、鳥取一中（現鳥取西高）、四高（現金沢大学）を経て、東京帝国大学医学部を卒業し、昭和二十年に米子医学専門学校を開校して、初代校長となりました。終戦直後で、医学書も器材もそろえるのが難しい時代でしたが、光造さんは、試験管一本に至るまでそろおうよう、あきらめず協力をお願いして回りました。戦争に負けたときには、学校を廃止する動きがあったのですが、国を説得し続け、この米子医学専門学校と病院を守り抜いたのです。

そして、専門学校を医科大学へと昇格させるために、何度も

東京に通い、文部省の役人と話し合いを続けたのです。当時は、交通事情が悪く、時には汽車に窓から乗りこまなければならないこともあったそうです。このとき、光造さんは、六十歳を超えていました。

苦勞の末、とうとう昭和二十三年には、山陰地方初の大学である「米子医科大学」に昇格させ、さらに翌年には、「鳥取大学医学部」へと昇格させていきました。これは、鳥取で医師になることをめざす医学生にとっては夢をかなえる希望となったばかりでなく、米子市だけでなく鳥取県全体の医学の発展の基盤となりました。私達の身の回りには、下田光造さんが尽力してつくられた「鳥取大学医学部」で学び、鳥取県の医師として活躍しておられる方は、たくさんいらっしゃいます。

また、下田光造さんは、ぜいたくを好まず、こつこつとまじめに研究を積み重ね、精神医学者としても活躍されました。あるときの学会出張の際には、列車の座席は三等車を利用し、節約をなさっていたそうです。三等車は、一等車と比べると、値段はかなり安いものの、座席はせまくすわり心地は悪いのです。教授会で、

「せめて、二等車に乗ってはどうですか。」

とすすめられたものの、

「いえいえ、四等車でもと思うのだが、三等車しかないからねえ。」

と笑いながら答えられたそうです。学長でありながら、まじめで質素な生活をし、思いやりをわすれない下田光造さんは、学者としても教育者としてもりっぱな方だったのです。

このように、戦争の時代に、“鳥取大学医学部”の基礎づくりをし、米子市を医学の町にした下田光造さんの功績は多くの方に認められ、米子市名誉市民に選ばれたのです。

また、医学の発展に力を尽くした偉大な下田光造さんにたいし、河原の和奈見に石碑を建て、鳥取県庁の一階の県民室には、肖像をかかげ、下田光造さんの偉大な功績を今の時代にも伝えているのです。

(散岐小学校 自作)



河原町 和奈見（わなみ）の現在の風景です。



【医学の発展にかけた生涯 く下田光造く】

一 ねらい

鳥取県の医学の発展に尽くした地元出身の下田光造の努力を知り、その功績に畏敬の念を持つことを通して、郷土を愛する心情を養う。

二 資料選定の理由

- ・河原町和奈見出身の下田光造が鳥取大学医学部の設立の原動力となり、鳥取県の医学の発展に多大な影響を及ぼしたことを理解させたい。
- ・光造は学業に優れていただけでなく、まじめで質素な生活を好んだ。人間としてのすばらしさにも共感させたい。
- ・下田家は、現在は空き家となっているが、地元の方が下田光造の功績を誇りに感じ、管理を引き受けている。
- ・地元の先人の功績を知り、郷土への感心を高め、郷土を大切にしていこうという気持ちを高めたい。

三 参考文献

- ・『きらめく120人 市120周年記念』
- ・『郷土が誇る人物誌』

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、話し合う。</p> <p>○下田光造さんの育った河原町和奈見はどんなところだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然が豊かで、のどかなところ ・川や木々の緑に囲まれ、子どもたちが伸び伸び遊べるところ <p>○下田光造さんは、どんな人柄でしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まじめで、おもしろい人 ・ぜいたくをしないで質素な生活を好む人 <p>◎下田光造さんは、どんな気持ちで何度も東京に通って鳥取大学医学部を設立したのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうしても米子に医科大学を作りたい。 ・鳥取の医学を発展させたい。 <p>2 自分の住んでいる地域の自慢したいところを発表し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・和奈見の川や山の写真を見て、豊かな自然のよさを感じさせる。 ・60歳を超え体力的にもきつい中、光造さんを動かした医学への熱意や信念に共感させる。 ・自分の地域の誇れるものがあることに気づかせる。

桜のあしながおじさん

瀬川弥太郎

鳥取市を流れる袋川。その右岸の土手は、「桜土手」とよばれ、およそ百年も前から鳥取市民に親しまれています。約二キロメートルにわたって桜の木が植えられ、花がさくと、まるであわいピンク色のカーテンのように土手をおおいます。川面にうつるそのあでやかさは、県内でも有数のものです。春には、満開を待ちかねた家族やグループがあちこちで輪になって座り、思い思いにその花を楽しんでいます。桜土手は、鳥取市民の自慢の一つでもあります。



そんな桜土手も、袋川から姿を消したことがあったのです。

昭和二十七年四月十七日。燃えさかる炎が鳥取市を包みこみました。鳥取大火です。鳥取駅周辺から発生した炎は、袋川までおよび、桜土手一帯も飲みこみました。桜の木は無ざんに焼け

こげました。枝葉はなくなり、幹は真っ黒。あちこちで木々がたおれ、まるで地ごくのようでした。この大火で鳥取市の三分の二が焼きつくされ、人々が住む家もなくなってしまったのです。自分たちの生活を立て直すために必死だった市民には、桜土手のことをふり返る余ゆうはありませんでした。



それから九年たった昭和三十六年。少しずつ町の復こうが進んでいたころ、鳥取市長あてにとつ然、桜のなえ木百本がとどきました。どれも高さ一メートル以上ある立派ななえ木です。しかし、その送り状には、送り主も、送った理由も何も記されていません。市長は、不思議に思いました。

桜のなえ木は、次の年も、その次の年も送られてきました。その出来事を知った人々は、名前の分からない桜の送り主のこを、いつしか『桜のあしながおじさん』と呼ぶようになりました。

「毎年、なえ木を送ってくれる人があるんだが、だれか分から

ない。発送元が 埼玉県のなえ木業者になつていたので、それを手がかりに送り主を調べてくれないか。」

当時の高田鳥取市長は、部下の安治あんじさんに相談しました。安治あんじさんは早速さつそく送り元のなえ木業者にあたつてみました。しかし、

「送り主との約束なので……。」

と予想外の返事が返つてきました。送り主は、決して名前を明かさないうようにとなえ木業者に伝えていたのです。それでも、

安治あんじさんは、何度も事情を説明し、やつこのことで名前を知ることができました。その人の名は、瀬川せがわ弥太郎やたろうさん。京都大学に勤める男性だったのです。それが分かったのは、初めてなえ木が送られてから五年も月日がたった昭和四十一年のことでした。

瀬川さんは、植物について深く勉強するために、昭和四年から七年まで鳥取高等農林学校（現在の鳥取大学農学部）に通いました。京都から一人で鳥取に来た瀬川さんでしたが、大学の仲間や下宿の主人、近所の人々に温かく接してもらい、毎日一生けん命勉強に打ちこみました。しかし、見知らぬ土地での生活に、ふとさみしさを感じるようになりました。また、大学の勉強に行きづまり、なやむこともありません。そんなとき、

瀬川さんが必ずおとずれる場所がありました。それが桜土手だったのです。

「ここは、いつ来てもいいなあ。」

春は満開の桜の下にのんびり座り、夏は青葉の下で本を読みました。秋は紅葉をながめ、冬は葉の落ちた並木道を散歩しました。

鳥取大火から七年たった昭和三十四年。瀬川さんは同窓会どうそうかいのために二十七年ぶりに鳥取をおとずれました。その瀬川さんが真っ先に向かったのは、思い出のいつぱいつまった桜土手でした。胸をはずませて桜土手に着いた瀬川さんは、はっと息を飲みました。桜土手が消えていたのです。

「桜が一本もないなんて……。」

瀬川さんは、思わずそこに立ちつくしてしまいました。

京都にもどった瀬川さんは、一人部屋にこもり、長い間考えました。瀬川さんは、ある決心をしました。それが、桜のなえ木を鳥取市に送ることだったのです。

元のような桜並木なみにするには、多くのお金が必要です。しかし、大学の助手として働く瀬川さんの給料は決して高くはありません。



ませんでした。さらに、東京の大学に通う長男のために仕送りもしなければなりません。そんな中、自分の小づかいを節約し、本を書いたときの原こう料をあてて桜のなえ木をかうことにしたのです。時にはわずかな保険をはたいてまで買い続けたりもしました。そんな様子を見ていた家族からは、

「何もそこまでしなくても……。」
と言われることもありました。

それでも瀬川さんはなえ木を送り続けました。この間八年。約八百本にもおよぶなえ木を送ったのです。

このなえ木は、桜土手はもちろん、鳥取城の二の丸や天神川の土手など、鳥取市のいろいろな場所に植えられました。それを市民が毎日水やりをしたり、草取りをしたりして一生けん命世話をし、立派に育て上げてきました。こうして桜土手には、

一人また一人と人が集まるようになり、いつしか昔のように多くの人々のいこいの場として見事によみがえったのでした。

平成五年、「桜のあしながおじさん」瀬川さんをむかえ、その功績^{※1}をたたえる顕彰碑^{※2}の除幕式^{※3}が行われました。瀬川さんがずっと心の中にいだき続けていた桜並木に出会うのは、実に六十年ぶりでした。瀬川さんは、桜並木をゆつくりながめたあと、式に参加した人々に深々と一礼しました。そのほおには一筋のなみだが流れていました。

※1 功績 … あることを成しとげた手がら。すぐれた働きや成果。

※2 顕彰碑 … かくれた良い行いや功績などを広く知らせるために文字などをきざんで建てる石

※3 除幕式 … 記念碑などが完成したとき、かけてある幕を取りのぞいて公開する、お祝いの儀式。

参考文献

「瀬川弥太郎と袋川の桜」

桜土手の桜を愛でる会・袋川をはぐくむ会

編（今井書店鳥取出版企画室）

【桜のあしながおじさん ～瀬川弥太郎～】

一 ねらい

鳥取市を代表とする名所桜土手を復活させるために桜の苗木を送り続けた瀬川弥太郎さんの姿を通して、ふるさとを大切にし、自分にできることをしていこうとする態度を育てる。

二 資料選定の理由

・京都出身の瀬川弥太郎さんは、大学生活の心の支えになっていた桜土手が、鳥取大火で消失したことを知り、自分でできることはないかと考え、匿名で八年間八〇〇本もの苗木を送り続けた。

・今まで桜土手を何気なく見ていたことども達にとって、先人の郷土への思いを身近に感じ、自分たちも郷土を大切にしていこうという気持ちが持てる興味深い資料である。

三 参考文献

・『瀬川弥太郎と袋川の桜』桜土手の桜を愛でる会・袋川を育む会編（今井書店鳥取出版企画室）

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読み、瀬川さんの気持ちを話し合う。</p> <p>○瀬川さんは、桜土手の桜の下でどんなことを考えていたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鳥取にはこんなきれいなところがあるんだ。 ・ここに来ると心が落ち着くな。 <p>◎瀬川さんは桜の木をどんな思い出送り続けていたのでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大好きな鳥取の風景をもう一度見たい。 ・桜並木を復活させ、鳥取の人たちを元気づけたい。 <p>○除幕式で一筋の涙を流した瀬川さんはどんな気持ちだったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こんなにしてもらってありがたい。 ・送った桜をここまで育ててくれた市民に感謝したい。 <p>2 学んだことを話し合う。</p> <p>○どのようにしていくことがふるさとを大切にしていくなのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・祭りや行事に積極的に参加し、地域を元気にしていくこと。 ・故郷のために尽くした人のことを多くの人に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・京都出身の瀬川さんが鳥取に愛着を持った理由に気づかせる。 ・8年間も桜を送り続けることができた原動力について話し合わせる。 ・顕彰碑を建ててもらったうれしさだけでなく、同じ気持ちで桜を育ててきた市民への感謝の気持ちにも気づかせたい。 ・故郷を大切にすることを考えることで、自分が故郷のためにできることを考えさせ、故郷に尽くす意欲を高めさせる。

音のないフィールド

く夢に向かって跳び続ける 前島博之く

二〇一三年夏、ブルガリアでデフリンピックが開催された。デフリンピックとは、四年に一度世界規模で行われる聴覚障がい者のための総合スポーツ競技大会である。この日本代表選手団の中に、前島博之はいた。

「今度こそ。」

ソフィア空港に降り立った彼は、心の中でそうつぶやいた。彼にとって、今回のデフリンピックは四回目の世界大会である。しかし、今までその都度入賞はしてきたものの、メダルは後一步というところで逃してきた。その悔しさをばねに今まで頑張ってきたのだ。そう、あの日走り高跳びに魅せられた時から……

中学部に進んだ私は、兄の影響もあって陸上部に入ることにしました。そんなある日、先輩が走り高跳びの練習をしているのをなんとなく見ていた時のことでした。きれいな曲線を描き

ながら駆け出したかと思ったら、体がふわっと浮き上がりバーを越えていったのです。

（すごい。自分もこんなふうに思い切りジャンプしてみたい。）

先輩の姿を目で追いながら、その美しさに思わず見とれてしまいました。それからというものの、私は、高跳びの練習に夢中になりました。跳ぶことが楽しくてたまらなかつたのです。床を蹴った瞬間に目の中に飛び込んでくる世界、宙に浮いた自分の体を感じる瞬間、なんともいえない感覚を覚えました。高跳びには他の種目にはない世界が広がっていたのです。その後、中学一年生の県ジュニア選手権では一メートル五十センチメートルを跳び優勝。ジュニアオリンピック（全国大会）の出場を決めたのです。私の活躍は新聞にも載り、学校でも初めての快挙にたくさんの方が心から喜んでくれましたし、期待も寄せられました。

しかし、耳の聞こえない私には、他の選手にはない不安や心配が絶えませんでした。活躍の場が大きな大会となり学校から外の世界に広がれば広がるほど、自分の障がいをよく理解していない人とも関わっていかねばならないからです。強化合宿には、普段の練習の何十倍もの集中力で臨みました。「タツ、タツ、タツ、タツ、ターン」と助走のリズムをとったり、聞こえない

い状況の中で、動きや文字からでは理解しにくい音の強弱を感じながら踏み切るタイミングを計ったりすることは、他の選手にはない苦勞で、肉体的にも相当な疲れを感じました。そして、なによりも指導者の言葉が聞こえない、仲間とのコミュニケーションがとりにくいということは精神的にもかなりの負担だったのです。そんな時、必ずそばにいて手話通訳をしたり励ましたりしてくださったのが聾学校の中尾先生をはじめとする陸上部顧問の先生方でした。

中学三年になるころには、常に鳥取県のランキングのトップに位置するほどになり、自分から積極的に合宿に参加したり試合に臨んだりするようになっていきました。この年の秋には一米ートル八十五センチメートルが跳べるようになっていました。(目標は二メートル。このバーを跳んで、世界に通用するアスリートになってみせる。) 心に固く誓ったのは、この頃のことでした。

高等部に進んだ私に、うれしいことがありました。それは、今まで合宿などで高跳びの指導をしてくださった森本先生が聾学校に赴任してこられたのです。私は、これまで以上に恵まれた環境の中で日々練習に取り組むことができました。記録も順

調に伸ばし一米ートル九十センチメートルを跳び、埼玉国体にも出場することができました。二年生の時には、なかなか自己新記録が出せず苦しい日々を過ごすことになりましたが、今になってみると、そのころ勝利に対する執念のようなものを学んだのではないかと思っています。三年生になり、やっと一センチメートル記録を伸ばすことに成功しました。

そんな中、引退を目の前に最後の大会「全国聾学校陸上競技大会」が行われました。あと一センチメートル自己記録を更新できたら、大会新記録となるのです。自分自身を奮い立たせてフィールドに立ち、一米ートル八十九センチメートルまでは続けてなんなくクリアすることができました。いよいよ大会新となる九十二センチメートル。跳んだことのない高さに思わず力んでしまい一回目を失敗。身体を突っ込みすぎるといふ森本先生の指摘もあって、フォームを確認してからの二回目のチャレンジ。

(やった。跳べた。)

揺れるバーを見上げながら跳躍を成功させた喜びを実感しました。記録に対するプレッシャーも大会新記録を出したことで消え、無心で臨んだのがよかったのか、このあと九十五センチメートル、九十八センチメートルを成功させ観客から大きな喝采を

受けました。中学三年生のときに目標にした二メートルまであと二センチメートルというところまでできたのです。うれしさが身体の中からこみ上げてきて震えが止まりませんでした。

高等部を卒業した私は、岡山の環太平洋大学に進学しました。

新たに開学したばかりの学校で、運動にはかなり力が入れられていましたが、家族もそばにいない、先輩もいない、コーチや練習環境もそれまでとまったく変わってしまったので生活に慣れるだけでもかなりの時間がかかってしまいました。記録がどんどん落ちることが怖くて、ただひたすら練習していたことをおぼえています。二年生になると新しい競技場ができ、楽し



く練習することができるようになってきました。自己記録も少しずつともにもどり調子を上げていきました。

三年生になり順調にシーズンを迎えたと思っていた矢先のことです。練習中に右足のかかとを打撲負傷してしまったのです。九月にはデフリンピックが

控えているというのに、焦るばかりで満足に練習できない日々が続いていました。

(今シーズンはだめかもしれない。あきらめるしかないか……)

そんな時に、鳥取によいトレーナーナールームがあるということを知り、村上トレーナーと出会うことになります。そこで、自分の身体のバランスが悪いということに気づかされ、村上トレーナーの指導のもと徹底的に身体のバランスを改善し、自分に合ったトレーニングを積みました。その成果もあったのか、台北で行われたデフリンピックに参加することができ、なんとかシーズンベストとなる一メートル九十三センチメートルで八位に入賞することができました。そして、シーズン最終戦では一メートル九十六センチメートルと記録が戻ってきていました。



シーズンオフも練習に励み、四年生では、シーズン開幕から安定して跳躍ができるようになってきていました。その年は、卒業学年ということもあって忙しい日々で練習時間も十分に取

れなくなってきましたが、空き時間を見つけては自分に合った練習法を考え、短時間でもできる質の高い練習を工夫してやるようにしました。やはり、自己ベストを更新することはできませんでしたが、

(まだまだやれる。自分を信じて跳んでいこう。)

そう決めています。

その後、社会人になり、聾学校の講師として働き始めてからは、家族がそばにいる住み慣れた環境にもどったことや部活動の時間に生徒と一緒に練習したり仕事の後練習を工夫したりするようになりました。自分を支えてくれる人たちの中で過ごすということは、自分が考えている以上に精神的に安定するものなのかもしれません。昨年春、その時は何の前ぶれもなくやってきたのです。

忘れもしない二〇一二年四月二十九日。シーズンに入ってわずか二戦目のことでした。いつも通り、一メートル八十五センチメートルからスタートし、八十五センチメートル、九十センチメートルとバーを揺らしながらもなんとか一回でクリア。次の九十五センチメートルは、一回目失敗。そして、二回目の跳躍、

大きくバーが揺れるが、かろうじて成功。

(よし、これで二メートルの挑戦権を得た。)

二メートルへの挑戦は、今までにも何度もありました。しかし、一度として成功したことはありません。成功する自信も正直言ってありませんでした。でも、挑戦するからにはやるしかない、そう思って思い切り跳びました。なんと、バーを揺らさず一回目で成功したのです。

(ついに、やった！)

心から跳ぶことが楽しいと思えた瞬間でした。高三の時、一メートル九十八センチメートルを跳んでから二センチメートルを更新するのに六年間かかったことになりました。中学三年の時に、目標を二メートルにしてから実に九年という月日がたっていました。

前島博之は語る。夢は、地道な努力と準備があって達成できるもの。どんなに苦しい思いをして頑張っても一瞬で打ち碎かれることもある。また、たとえ栄光をつかんだとしてもそれを持続することは難しい。それでも、私は挑戦し続けたい。そして、この夢は誰かを打ち負かして勝つことを意味するのではなく、

自分自身に挑戦し続けることにある。夢に向かって跳び続けるということは、時に孤独な闘いでもあるが、家族やコーチ、仲間の支えや周囲の人とのつながりの中にある。



二〇一三年八月三日十七時、走り高跳び決勝。前日の走り幅跳び決勝では、六メートル九十九センチメートルをマークし七位入賞を決めていた。「やるだけのことはやってきた。さあ、いくぞ。」日本で応援している人達にメッセージを残しフィールドに立った。一メートル九十九センチメートル四位入賞。後一歩というところでメダルを逃したが、彼から日本に送られたメッセージには、「悔しいーでも、よく考えてみれば、今シーズン最高記録であり、国際大会での自己最高の成績を残せた。」とあり、添付された彼の写真には、満足でいっぱい笑顔があふれていた。

デフリンピックの幕は閉じた。しかし、前島博之の挑戦はまだ続く。世界大会でメダルを獲得するという夢に届くまで……次の一歩はもう始まっているのだ。

高跳びの選手としては決して高くない身長。聞こえないというハンディ。彼の跳躍にはそんなことは微塵も感じさせない。今日もまた、音のないフィールドが彼の目の前には広がっている。

(久松小学校 自作)

音のないフィールド

～夢に向かって跳び続ける前島博之さん～

1988年 鳥取
前島博之さん生まれる。

生まれつき耳が聞こえない。
聴力レベル100～120デシベル
(ジェット機の爆音がかすかに聞こえる程度なので、
普段の会話などは全然聞き取ることができない。)



1990年 2歳
鳥取県立聾学校 入学
18歳で卒業するまで通う。



小さいときから身体を動かすことが
大好きな子どもで、いつも父や2歳年
上の兄と一緒に野球をしたり、友達と
走り回って遊んだりしていた。

2000年 12歳(6年生)
岩美郡(当時)小学校陸上競技大会
ソフトボール投げ 優勝
記録は55メートルぐらい

野球好きな少年だった。



2001年 13歳(中学部に進級)

兄の影響で陸上部に入部

走ることも跳ぶことも大好き
「100メートル」
「走り幅跳び」の選手として活躍。



2001～2003年
聾学校 中学部時代
中尾茂先生に指導を受ける。
(平成17年度まで聾学校勤務)
技術的な指導だけでなく、メンタル
面でも大きな支えに。



2001年 夏

先輩が「走り高跳び」に取り組む姿を見て興味を持つ。

これを機に
「走り高跳び」に
転向！



2001年 秋

鳥取県ジュニア選手権大会 優勝

記録 1m50cm

ジュニアオリンピック

(全国大会) 出場

2007年 4月

環太平洋大学(岡山)に入学
一人暮らし

環境の変化に苦しむ。



2007~2010年 大学時代

1年生 記録 1m93cm

2年生 第1回世界ろう者陸上競技選手権
トルコで開催

記録 1m88cm 7位入賞

3年生 第21回夏季デフリンピック(台湾)

記録 1m93cm 8位入賞

4年生 記録 1m96cm

2004~2006年

聾学校 高等部時代

森本克己先生に高跳びの専門的な
指導を受ける。

(現、倉吉市立河北中学校勤務。

鳥取県中学生の高跳びの指導者)

1年生 記録 1m90cm

(埼玉国体 出場)

1・2年生 記録 1m90cm

2011年 4月

鳥取県立聾学校講師として勤務

住み慣れた鳥取に戻る。

記録 1m97cm

村上弘コーチ(バランス調整村)と出
会い、トレーニングの課題などが
見つかる。バランストレーニング
で調整しながら聾学校(陸上部
の生徒と一緒に)と布勢陸上
競技場で練習を重ねる。

2006年 10月

全国聾学校陸上競技大会(高知)

走り高跳び

記録 1m98cm

(大会新記録で3連覇達成)



走り幅跳び

記録 7m01cm

(追い風2m以上のため非公認記録)

2012年 4月

鳥取県東部記録会

走り高跳び 記録 2m(自己ベスト)

8月

第2回世界ろう者陸上競技選手権大会

カナダで開催

5位入賞 記録 1m96cm

2013年 8月

第22回夏季デフリンピック 開催

ブルガリアの首都ソフィア開催

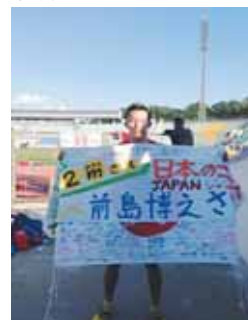
走り高跳び 4位入賞

記録 1m99cm

(今季 ベスト記録)

走り幅跳び 7位入賞

記録 6m99cm



※久松小学校の5年生が贈った応援旗と聾学校
のみなさんの寄せ書きを手に(写真)

前島博之さん 主な大会記録

	1 0 0 m	走り幅跳び	走り高跳び
中 1	1 3 " 8 0	4 m 8 5	1 m 5 5 ジュニアオリンピック出場
中 2	1 3 " 0 7	5 m 4 4	1 m 7 0
中 3	1 2 " 5 5	5 m 8 0	1 m 8 5
高 1		6 m 0 2 全国聾学校陸上競技大会 3 位	1 m 9 0 ジュニアオリンピック出場 埼玉国体出場 全国聾学校陸上競技大会優勝
高 2	1 1 " 5 9	6 m 5 6 全国聾学校陸上競技大会 2 位	1 m 9 0 全国聾学校陸上競技大会優勝
高 3	1 1 " 2 9	7 m 0 1 (非公認) 全国聾学校陸上競技大会優勝	1 m 9 8 全国聾学校陸上競技大会 3 連覇
大 1		6 m 1 3	1 m 9 3
大 2		6 m 1 0	1 m 9 1 第 1 回世界ろう者陸上競技 選手権大会 (トルコ) 7 位入賞
大 3	1 1 " 7 2	6 m 3 6	1 m 9 6 第 2 1 回夏季デフリンピック (台湾) 8 位入賞
大 4	1 1 " 6 5	6 m 5 6	1 m 9 6
社 1		6 m 7 2	1 m 9 7
社 2	1 1 " 5 0	7 m 0 3	2 m 0 0 第 2 回世界ろう者陸上競技選手権 大会 (カナダ) 5 位入賞
社 3	1 1 " 6 4	6 m 9 9 第 2 2 回夏季デフリンピック (ブルガリア) 7 位入賞	1 m 9 9 第 2 2 回夏季デフリンピック (ブルガリア) 4 位入賞

【音のないフィールドへ夢に向かって跳び続ける前島博之】

一 ねらい

自分でやろうと決めた夢に向かってひたすら努力しそれを叶えようとする前島さんの生き方を通して、強い意志を持って夢や希望に近づこうとする態度を養う。

二 資料選定の理由

本資料は、鳥取県出身の現役アスリートで世界の舞台で活躍する前島博之さん（鳥取聾学校講師）の生き方を児童に伝えたいという意図で取材し自作したものである。生まれたときから聴覚に障がいのある前島さんは、聾学校中学部のときに陸上競技の走り高跳びに出会う。「大好きな高跳びで二メートルの高さのバーを跳び越える」ことを目標にしてから九年間跳び続け、目標を見事達成したことや「世界大会でメダルを獲得する」という夢に向かって、「聞こえない」というハンデをものとしないうで挑戦し続ける前島さんの前向きでしなやかな生き方と出会い、感動と勇気を受け取らせるところがポイントである。

前島さんのこれまでのあゆみや高跳びの記録が一目でわかるイラストページを事前に有効に活用し、授業では読み物資料の部分を感動的に扱うようにしたい。

三 参考資料 なし（聞き取りにより作成）

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料「音のないフィールド」を読み、考えたり感じたりしたことを中心に話し合う。</p> <p>○前島さんのこれまでの歩みで、みんなが心を動かされたことは何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・聞こえないことで精神的な負担を感じながらも、何十倍もの集中力で練習に臨み、目標を達成させた。 ・環境の変化や負傷にもくじけることなく、様々な人と関わりながら練習を工夫してきた。 <p>○6年かけて2cmを更新し目標の2mに届いたとき、前島さんはどんなことを考えたのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あきらめずに自分を信じて頑張ってきてよかった。 ・周りの人の支えがあってこそ、今の自分がある。 <p>◎前島さんが夢を叶えるために大切にしていることは何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分を信じ、あきらめない心 ・支えてくれる人への感謝 ・常に具体的な目標を掲げそのための努力を怠らない <p>2 前島さんの生き方に学んだことを発表する。</p> <p>○今日の学習で学んだことを、自分のどんなところに取り入れたいと思ったのか発表しましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・イラストページ（生い立ち）を事前に読んでおき、それぞれが感じた前島さんの姿を出し合ってから資料に入る。 ・目標に届くまでの前島さんの行動や生き方から学んだことを伝え合い、充実した生き方についての自覚を深めるようにする。 ・抽象的な言葉ばかりが並ばないように、「前島さんの強さを支えているものは何か」ということを深く考えさせる。 ・前島さんの生き方に自分を重ね合わせることで、夢の実現に向けて、確かな歩みを続けていこうとする態度を高めたい。

我が国最初のX線実験者

村岡 範為馳

ペリー率いる黒船が浦賀にやってきた年一八五三年、村岡範為馳は現在の鳥取市河原町釜口に医師の息子として生まれました。父親は江戸に開かれた塾、鳩居堂において、塾頭も勤めた秀才でした。そんな父親の影響もあつたのか村岡範為馳は幼いころから勉強熱心な若者でした。

一八七〇年（明治3）明治政府が新生日本のために三一〇名の奨学生を現在の東京大学に招きますが、鳥取から藩の命令で送られた奨学生の一人が一七歳の村岡範為馳でした。

範為馳が二十五歳の時、師範学校の調査のためにドイツに派遣されることになり、ドイツのストラスブル大学に留学しました。

ドイツ留学当時の範為馳は実験を重ね、炭は金属と異なり温度が上がると電気抵抗が減少するという実験結果を得ます。その成果をドイツで今でも発行されている歴史ある学術雑誌に投稿し、外国の学術雑誌に論文が掲載された初めての日本人となりました。また、ストラスブル大学で範為馳が得た学位は、外国で初めて日本人が授与された博士号でした。当時、科学技

術が世界的な水準には達していなかった日本の中で、範為馳は、ヨーロッパの研究者と肩を並べることのできた一人だったのです。

ストラスブル大学で、範為馳は、X線の発明で有名なレントゲン博士と同じ研究室で研究していたことがありました。そんな縁もあり、レントゲン博士がX線を発見したという知らせが日本にいる範為馳のところへも届きました。範為馳四十二歳の時でした。その知らせを受けた範為馳は、いてもたってもいられなくなりました。

翌年X線の研究を始め、苦勞に苦勞を重ね、日本で初めてX線の発生を成功させました。明治維新からわずか二十九年後のことでした。

X線発生実験が成功した二日後、範為馳は、レントゲン博士にあてて手紙を書きました。その手紙には、レントゲン博士のX線発見というすばらしい仕事をたたえるとともに、自らもX線装置の開発に苦心したことを綴り、家族写真を同封して、レントゲン博士あてに送りました。また、驚くことに、範為馳は手紙の中で、

「ホテルの光が未知の放射線を含んでいるのではないかと思う。私が行っている研究について論文を書いたので、読んで

ほしい。」
と依頼していたのです。

残念ながらホタルの研究の仮説は、のちに否定されました。

しかし、範為馳の行動が日本のX線医療の原点となり、医療技術発展に大きく貢献したのは言うまでもありません。

また、範為馳の関心は科学の分野にとどまらず、多方面にわたりました。中でも、音楽の分野での活躍には目を見張るものがあります。



村岡 範為馳
(1853 ~ 1929)

範為馳が三十八歳の時、当時の東京音楽学校校長になり、祝祭日唱歌審査委員長も務め、「君が代」が学校で歌われるようにしました。また、翌年には鳥取に帰郷し、「普通教育における音楽」という講演を行い「音楽とは音響であって人を感動させるものである」と語り、この講演を聞いた人々に深い感動を与えました。感動を受けた人々の中には上京して範為馳が校長を務める東京音楽学校に入学する人もいました。その一人が田村

虎蔵です。その後、岡野貞一

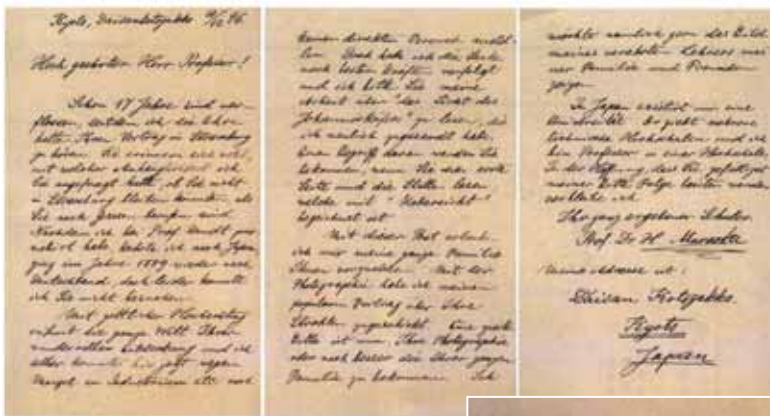
も入学し、そこで勉学に励み
ました。そして、田村虎蔵は「大

黒様」や「はなさかじいさん」、

岡野貞一は「ふるさと」や「も

みじ」「春が来た」など日本中の人々に今もなお、歌い継がれている曲を作曲したのです。

範為馳の教室には「小生（私は）多忙につき長談お断り」の貼り紙がしてあったそうです。様々な分野で功績を残した範為馳の姿がこの貼り紙からも分かるような気がします。



範為馳がレントゲン博士にあてた手紙と同封した家族写真



(河原第一小学校 自作)



釜

【我が国最初のX線実験者く村岡 範為馳く】

一 ねらい

新しいことを進んで追求しようとする範為馳の気持ちを考
えることを通して、真理を大切に、探求心をもって、進ん
で新しいものを求めようとする態度を養う。

二 資料選定の理由

村岡範為馳は身近なことから課題を見出し、納得いくまで
自分で追求する意欲に満ち溢れた人物である。また、あらゆる
ものに興味関心を持ち、その対象にはいつも真剣であった
ことから、日本のX線医療だけでなく、音楽の分野において
も功績を残し、今の私たちの生活を支える一人となった。

郷土の先人の努力でわたしたちの生活が便利で快適になっ
ていることに誇りを持つとともに、範為馳の生き方を通して、
現状に甘えるのではなく真理を求める態度を大切に、物事
を多様な発想でとらえるとともに、自分の生活を少しでもよ
くできないかと考え、工夫して生活しようとする態度を育て
たい。

三 参考文献

- ・『科学技術Xの謎』（京都大学総合博物館 監修編）
- ・『鳥取市人物誌きらめく120人』（鳥取市）

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読んで範為馳の気持ちについて話し合う。</p> <p>○レントゲン博士がX線を発見したという知らせを聞いたとき、範為馳がいてもたってもいられなくなったのはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分も研究したい。 ・自分にもできることはないか。 ・ストラスブール大学に行きたい。 <p>○どんな考えでレントゲン博士に手紙を書いたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すばらしさをたたえたい。 ・自分の研究も知って欲しい。 ・論文をアドバイスして欲しい。 <p>○「小生（わたし）は多忙につき長談お断り」の貼り紙をしていたのはなぜだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究者には時間が大切だった。 ・新しいものを開発することに力をそそぎたいから。 ・進んで研究をしていきたい。 <p>◎範為馳の生き方から新たに考えるようになったこと、より深く考えるようになったことはどんなことだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勉強熱心な姿 ・進んで新しいものを求めようとする熱意 ・研究に対する積極的な態度 ・向上心 	<ul style="list-style-type: none"> ・X線についてあらかじめ説明しておく。 ・現状に満足するのではなく、自分で検証したり、さらに調べてみようとする気持ちに共感させる。 ・研究に対する積極的な態度や向上心、常に新しい発見を目指す姿に共感させる。

これからの日本のためには 英字新聞が必要だ

山田 季治



山田季治は、幕末の一八四八年、中津藩（大分県）の藩士の三男として生まれました。

二歳の時、父が突然出家してしまったため、母と兄二人とともに伯父の家に取り取られました。しかし、伯父の家にも長くはいられず、親類の鳥取藩勘定方・山田忠右衛門の養子になることになりました。大好きな母と別れるのは、とても悲しいことでした。母にとっても、かわいいわが子を手放すのは、身を引き裂かれるほどつらいことだったでしょう。

「季治、手元で育ててやれなくて、本当にごめんね。新しい両親にかわいがってもらいなさいね。強くて真心のある人に育ててくださいね。」

季治は、突然母や兄と別れることになった悲しみに耐えながら、新しい両親に真心で接し、しっかりと少年に成長してい

きました。さらに、親戚に当たる福沢諭吉（山田季治は福沢諭吉夫人の従弟に当たる）の元で玄関番や書生をしながら、文明開化の風と福沢諭吉の思想や学問の仕方を学びました。福沢諭吉の影響で英語に親しみ、海外への関心も高くなっていきました。

そして、二十歳で鳥取藩のお蔵奉行となり、お蔵番として青谷に赴任しました。青谷は、江戸時代は海や陸の交通の要所で、宿駅の一つとして重要な役割をになっていました。藩の考えを知らせるための番所や年貢米を入れるお蔵もあって、お蔵奉行が置かれていました。季治は、青谷の人達に真心で接しながら、役人の仕事に熱心に取り組みました。

明治の世となり、お蔵奉行をやめた山田季治は、青谷の人々からぜひひとと望まれて、一八七三年（明治六年）に開校された潮津小学校（のちの青谷小学校）の初代校長になりました。そして、教科書に福沢諭吉の著書『学問のすすめ』も使って福沢諭吉流の教育に力を入れ、勉学の意欲の高い子ども達を育てていきました。

六年後、福沢諭吉のすすめで、名古屋の愛知英語学校の先生になることになりました。才能豊かな山田季治をもっと活躍させたという福沢諭吉のはからいでした。その時、山田季治は、潮津小学校の教え子達を、さらに自分のもとで教育したいと考え、

「気のあるものは出てこい。もつと上をめざしてみろ。」

と、名古屋から青谷の少年達に呼びかけたのです。この山田季治の呼びかけにこたえて、潮津小学校の卒業生である武信由太郎・中西美重蔵・石井寿延らが、武信の父親に連れられて名古屋に向かいました。そして、船に乗れる区間以外は歩き通しで、何日もかかって名古屋にようやく到着しました。山田季治は、子ども達を喜んで迎え入れ、愛知英語学校に入学させて、自ら熱心に指導をしました。先生としてだけでなく、宿舎の舎監長もして、子ども達の世話をしました。

教え子らが卒業していくと、今度は、英語学校の教職を退き、三菱会社神戸支店に勤務して、朝鮮支店の支配人になりました。さらに、三菱会社に日本郵船がつくられると、その幹部社員となって、長崎や北海道の支配人をするなど、活躍の場を広げていきました。

ある日、日野町出身の愛知英語学校の教え子、頭本元貞が、たずねてきました。

「日本を世界に通用する国にするためには、世界のできごとや政治・経済を英語で理解し、コミュニケーションをはかれるようにならないといけません。日本の方針を英語で外国に伝えることも必要です。そのためには、英字新聞が必要です。」

私は、伊藤博文閣下について海外の新聞経営を視察してきて、強くそう思っています。ぜひ、私に力を貸してください。山田さんに英字新聞社をつくっていただきたいのです。」

頭本の依頼は、思いがけないものでした。今の仕事にやりがいを感じているのに、それをやめて新聞社をつくるなど、無茶な話だと思いましたが、教え子の強い頼みです。

「頭本くんの考えはよく分かった。でも、そう簡単には決められないよ。返事は、もう少し待ってくれ。」

と答え、仕事の合間にいろいろな人に相談しながら考えてみました。しかし、なかなか決心がつきませんでした。そこで、尊敬している福沢諭吉に相談してみることにしました。

「やりたまえ、季治くん。私も、できるだけの協力をさせてもらうよ。私も、前々から、日本の近代化のためには英字新聞が必要だと思っていたよ。」

福沢諭吉のこの言葉に、山田季治は強く心を動かされました。そして、「英字新聞を、日本人と外国人との架け橋にしよう。」と決心したのです。

明治三十年、山田季治は会社をやめ、その退職金をつぎこんで福沢諭吉らの応援ももらいながら、ジャパンプタイムス社をつくりました。初代社長になった山田季治は、その時、四十九歳

でした。

山田季治は、ジャパントイムスの基礎作りのために、愛知英語学校の教え子達を集めました。頭本元貞を初代主筆とし、武信由太郎を副主筆に、中西美恵蔵を工場長兼支配人にしました。

さらに、青谷と鹿野の高等小学校から少年五人を呼び寄せ、工場で働かせて、鳥取県出身者が活躍できるようにしました。設立当時のジャパントイムス社は、社員の数は少ないながら、家族のような雰囲気でも和気あいあいと仕事をしていました。

日本人の手によりはじめて発行された英字新聞ジャパントイムスの発行を、山田季治は、その後十四年間にわたり私財を投じて支えていきました。中西美恵蔵は、愛知英語学校を卒業したあとアメリカに留学し、貿易会社勤めた後、ジャパントイムス社に入って、山田季治を助けた。武信由太郎は札幌農学校を卒業したあとにジャパントイムス社に入って山田季治を支え、その後、早稲田大学教授となり、「武信和英大辞典」「武信ポケット新和英辞典」という立派な辞典をつくって、日本の英語研究に大変貢献しました。

このように、山田季治は、人と人とのつながりを大切に、鳥取県人を大きく育てた人でした。そして、広い世界に目を向けて、新しいことに積極的に挑戦していった、チャレンジ精神



あふれる人でした。

山田季治は、社長の座を頭本元貞に譲った後は、青谷に移り住みました。青谷に帰って家業をついで有力商人になっていた石井寿延の強い薦めで、その後の生涯を青谷人として過ごすことにしたのです。そして、一九一六年、六十八歳の生涯を青谷の地で閉じました。

その後も、ジャパントイムスは、ジャパントイムズと名前を変え、今も多くの読者を得て、国内外にニュースを発信し続けています。

(青谷小学校 自作)

【これからの日本のためには

英字新聞が必要だ ～山田季治～】

一 ねらい

英字新聞の発行によって日本の国を世界に通用する国にしようと考え、私財を投じて日本で初めての英字新聞の発行を支えていった山田季治の生き方を考えることを通して、志を高く持とうとする心情を養う。

二 資料選定の理由

・山田季治は、人と人とのつながりを大切にし、鳥取県人を中央で大きく育て、活躍させた人である。そして、広い世界に目を向けて、新しいことに積極的に挑戦していった、チャレンジ精神あふれる人である。

・鳥取県人が主役となつて有名なジャパンタイムズの基礎づくりをしたことを知らせ、人と人とのつながりを大切にしながら努力することで道が開けたり、大事業をなしとげたりできることに気づかせたい。

三 参考文献

『鳥取市人物伝きらめく百二十人』『青谷小閉校記念誌』

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>1 資料を読んで山田季治さんの生き方について話し合う。</p> <p>○資料を読んでどんなことが心にのこりましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりがいのある仕事をやめて英字新聞社をつくったこと ・人と人とのつながりを大切にしたこと <p>○山田季治さんはどんな気持ちで、成功していた仕事をやめて英字新聞を作ろうと決めたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・尊敬している福沢諭吉に心を動かされたから ・日本人と外国人との架け橋をつくりたいと思ったから <p>◎山田季治さんが生きていく上で、大事にしていたこととは何でしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人とのつながり ・新しいことに挑戦すること ・目標を持ち続け、挑戦していこうとすること <p>2 学習を振り返り、自分の生き方について考える。</p> <p>○今日の学習で、あこがれることや、自分の生き方に取り入れたいと思うことは何ですか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に資料を読ませておくとともに、その時代背景、福沢諭吉などについて調べさせておく。 ・中心発問で主人公の心情を考え、決心を支えたもの（主題）を話し合えるようにする。 ・ワークシートに各自が記入し、主人公の考え方、生き方を自分との関わりの中で考えられるようにする。

中
学
校

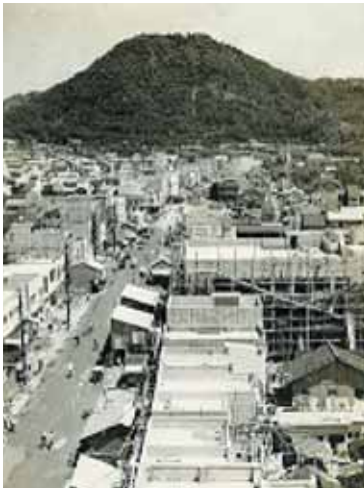
しゃんしゃん祭りの創始者 高田 勇



しゃんしゃん祭りの創始者である高田勇は、明治四十一年（一九〇八年）鳥取市横枕に生まれ、商工会議所勤務を経て、昭和三十四年市長となり、鳥取市の復興事業を成しとげました。

鳥取大火（昭和二十七年）後の鳥取市は、復興事業が進み以前の姿をとりもどしつつありました。

しかし、赤字財政は続き、状況はとても厳しいものでした。その状況を改善しようと、大規模工場誘致をすすめ、三洋電機誘致を成功させ、経済効果をあげまし



た。それでもまだ、鳥取市の財政は充分なものではなかったのです。高田は、鳥取市全体が賑わい、市民が活気づくような何かよい策がないだろうか、日々模索していました。

ある日、地元の伝統芸能である傘踊りを見ていてひらめきました。当時は、「鳥取祭り」がありましたが、露店が数軒並ぶ程度で盛り上がり欠けるものでした。

「この踊りは、迫力があり、見るのも楽しい。この傘踊りを市全体に広げられれば！」

高田は、頭の中に皆が傘踊りを楽しむ光景を思い浮かべました。傘踊りにかける夢が胸に熱く込み上げてきました。

しかし、問題がありました。その踊りは、男性しか踊れない程激しく、この傘ではとても重過ぎて子どもや女性では持つことも踊ることも不可能だったのです。高田自身、どうしたらよいかと何日も悩み、誰かに相談してみようと考えました。

翌日、近所に住む振付師の高山柳蔵のもとを訪ねました。

「因幡の傘踊りを、鳥取祭りで皆が踊り、楽しめるものにした。因幡の傘踊りを、誰もが踊れるものにはならないだろうか。そしてこの傘を、持ちやすい軽いものにできないものだろうか。どうか力を貸してほしい。」と頼み込みました。高山は高田の熱意に心を打たれました。そして、二人は日が暮れて辺り

が薄暗くなるまで語り合いました。

「よし。やってみようじゃないか。」

二人は、がっちりと手を握り合いました。

そしてついに、夢が叶ったのです。

昭和三十九年の鳥取市庁舎新築落成を記念して、この新作傘踊りが発表されました。会場は拍手に包まれ、高田は満面の笑みで大きくうなずき、拍手に応えました。

「鳥取祭り」は翌年から名称を「しゃんしゃん祭り」としました。「しゃんしゃん」とは、市街地の温泉で「湯がしゃんしゃんと沸く」と「鈴の音がしゃんしゃんと鳴る」という意味で名付けられました。その後、昭和四十五年第六回から「鳥取しゃんしゃん傘踊り」、平成に入ってから「平成鳥取音頭」、その後「しゃんしゃんしゃんぐりら」が創作され、現在の鳥取しゃんしゃん祭りでは、これらの曲に合わせて踊られています。毎年四千人を超える踊り子が一斉に踊る華麗な「鳥取しゃんしゃん祭り」は、今や全国にも広く知られる祭りとなっています。

(江山中学校 自作)



【しゃんしゃん祭りの創始者く高田勇く】

一 ねらい

郷土を愛し社会に尽くした先人に尊敬と感謝の念を深めることを通して、郷土の発展に努めようとする道徳的実践意欲を育てる。

二 資料選定の理由

- ・自分の住む地域社会に関心を持たせ、先人の熱い思いや魅力ある地域にしようとするところに焦点を当て、生徒に郷土愛を考えさせることのできる資料である。

三 参考文献


- ・『鳥取市人物伝 きらめく120人』
- ・『鳥取県伝説集 (上) 因幡編 野津 龍著』
- ・『生きている民族探訪鳥取 野津 龍著』

学習活動 ○ 主な発問・予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>○高田は地元の伝統芸能である傘踊りを見て、どんなことを考えていたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰もが踊れる傘踊りを実現させたい。 ・市民が楽しく生活できる地域を作りたい。 <p>○どうしたらよいかと何日も悩み考え、誰かに相談してみようと考えたのはなぜか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不安はあるが、実行しないと何もはじまらないから。 ・どうにかして鳥取市を活気づけたいという思い。 ・自分一人の力ではどうにもならないだろう。 ・どうしても傘踊りを実現させたい。 <p>◎がちりと二人が手を握り合ったとき、二人はどんなことを思っていただろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遂に夢が叶うかもしれない。 ・鳥取市の発展につながるかもしれない。振り付けを協力して考えよう。 ・傘踊りで鳥取を盛り上げるのだ。 ・鳥取の未来をこれから切り開くぞ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・傘踊りをすることで、急に鳥取市が生まれ変わったわけではないが、地域に生活する人々を活気づけようと試みる行動が郷土の発展につながったことに気づかせたい。

ピンチはチャンス!!
 成功するまで続けよう
 山下知子

志あるところに 道ありき
 ～山下佐知子物語～

▲山下佐知子さんからのメッセージ




1964年 大阪
 山下佐知子さん生まれる

東住吉区の長居公園
 (後に大阪国際女子マラソンの発着点)
 が遊び場

保育園のころは病気がちで
 母を心配させていた

1971年 小学校1年生
 父母の郷里 鳥取へ

すっかり元気になった山下さんは
 集中力抜群で負けず嫌い



佐知子ちゃん
 また走つてくれたの?
 この子は...

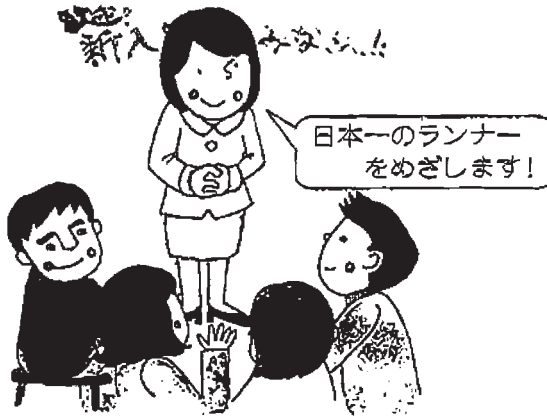


1972年 小学校2年生
 校内マラソン大会で優勝

マラソンはたのび
 誰にも負かぬぞ。
 負けず嫌いなこ。



新入生歓迎会で夢を語る



男子と一緒に練習
油野先生との二人三脚で三千メートル・五千メートル・一万メートルの県内記録をすべて更新

1984年 大学2年生
全日本三千メートル2位

1985年 大学3年生
鳥取県で「わかとり国体」開催
痛みのため先頭集団から脱落 五千メートル入賞できず悔しくて涙ポロポロ

1986年 大学4年生
京都女子駅伝大会
一区を一位でたすぎをつなぐ快挙



丈夫な体に生んでくれた両親に感謝しています

1987年 鳥取大学卒業
実業団からの誘いをきっぱりと断り
母の願いである中学校の先生となる

1978年 中学3年生

父の死
涙をこらえ 葬儀の翌日
強化合宿に参加



1982年 高校3年生
進路に悩む



1983年 鳥取大学入学

油野利博先生と出会う
油野研究室は
陸上に関する文献は日本一



鳥取大学教育学部附属中学校で、山下先生は、生徒達のよき相談相手でした。しかし、教師の仕事と練習の両立は難しく、陸上部の顧問として指導にあたっているときも、「自分の練習がしたい。」と思っっている自分に悩みました。「いま教師をやめたら、生徒に申しわけない。でも、今ならまだ間に合う。」結論の出ない苦しい日々が続きました。

そんなとき、思いもよらないことが起こりました。学校行事の大山登山で無事に下山し、「お疲れさま。」と言葉を交わした直後に、同僚の先生が、心不全で急死されたのです。「できるときに、できることをやっておかないと、自分もいつどうなるかわからない。」大山から帰った山下さんに、もう迷いはありませんでした。「決めました。」と一言。



校長先生は、「山下先生は、オリンピックに出るために学校をやめます。」と生徒に紹介し、激励しました。

鹿児島での選手生活は、三千メートルで自己新記録を出し、目標への手ごたえを確信する一方で、故障とのたたかいが待っていました。大事なレース中、足に激痛が走り、きけん棄権

を余儀なくよぎされました。強くなりたい一心で、無理な練習をして悪化したのです。練習を休み、仲間の走る姿を見ていると、「練習をやめて。」と叫びたいほど、精神的に追い込まれました。

山下さんは、恩師であるあぶらのとしひろ油野利博先生に手紙を書きました。

「……一月末に右膝の裏を痛め、二・三日完全休養したもののなかなか痛みが取れず、ここ一週間、スロージョギングと水泳とウォークばかりです。四五キロメートル走・三五キロメートル走と、最後の走り込みをするはずだったのに、とんでもないことになってしまいました。でも、レース直前まで最善を尽くすつもりです。スロージョギングしかできないのなら、浅井えり子さんになったつもりで、L・S・Dをとこ



とんやればいいし、筋トレは、静的にやれば故障箇所を痛めずにすみます。心肺系のほうは、レース一週間前からでも二・三回刺激を入れれば、マラソンペースくらいなら大丈夫でしょう。メンタル面は、故障したことによってむしろ強くなっています。イメージトレーニングも毎日やっています。食事も

甘いものと動物性蛋白質はかなり減らして、自然治癒力を高めるよう努めています。また、大事なときに故障してしまつたということで、卑屈ひくつになつてしまわないように、他の選手のタイム取りやマッサージなど、できる限りこちらから声をかけてやらせてもらっています。結果はどうであろうと、納得のいくプロセスを築いていこうと思います。……急に階段を登りつめた人は、何かを失うといいますが、私は、ゆつくり何かを得ながら登つていこうと思います。……」

その後、山下さんは、見違えるような走りを獲得して復帰しました。けがを防ぐための練習、故障時の自己管理、メンタル面の強化などを、人一倍熱心に研究し実践してきた努力が報われる時がきました。一九九一年三月、肩の力を抜いて走つた名古屋国際マラソンで優勝し、東京で開催された第二回世界陸上選手権大会で、銀メダルに輝いたのです。「山下快走でっかい銀」

「努力のランナー
夢を実現」、惜
しめない拍手とバ



ルセロナオリンピック出場権を手にしました。ウィニングランは、同僚選手のゴールを待つて三人で行いました。また、レース中に給水所で転倒した選手に対する、フェアな態度が評価されて、「フェアプレイ賞」を受賞しました。

現在、山下さんは現役を引退し、指導者として活躍しています。二〇〇二年の全日本実業団女子駅伝では、チームを優勝に導いた、唯一の女性監督となりました。不可能と思えることに本気で挑戦する選手を育てたい、鳥取から世界をめざす選手を送り出したい。山下さんは、若い選手の足を借りて走り続け、人々に、勇気と感動を与えています。

(鳥取県中学校教育研究会道德部会 作)

※スロージョグ 陸上の故障時の練習法 / 浅井えり子さん 陸上マラソンランナー / 心肺系のほうは： 調整期に脈拍を高める練習をすること / L・S・D = long slow distance の略語でゆっくり走ること / フェアプレイ賞 競技・勝負における公明なふるまいをたたえて贈られる賞



【志あるところに道ありき〜山下佐知子物語〜】

一 ねらい

ピンチをチャンスに変えようと努力し続けた山下さんの生き方を通して、自分のよさや個性を生かすことが、充実した生き方につながることを理解させる。

二 資料選定の理由

・山下佐知子さんはバルセロナオリンピックで4位に入賞した元マラソン選手で、現在は指導者として活躍している。
 オリンピックに出たいという思いで教師をやめ、膝の故障をも乗りこえ、世界陸上で銀メダルを獲得し、オリンピック出場という夢を実現させた山下さんの「できるときにできることをやっておく」という生き方は、生徒たちに勇気と感動を与える。夢を持ち、充実した生き方をするには何が必要なのかを考えさせてくれる資料である。

三 出典

- ・『志あるところに道ありき』鳥取県の郷土資料 二年
- ・指導資料 鳥取県中学校教育研究会道徳部会編（抜粋）

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>○先生をやめることを決断した山下さんをみてどう思ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のやりたいことがはっきりしていたから、決断することができた。 ・嫌なことを我慢してやるより、好きなことをやったほうがいい。 ・自分の人生は自分で決めることが大切。 <p>○山下さんはどうやってピンチをチャンスに変えたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな道、自分を生かす道を選択していたから我慢できた。 ・常に、強くなりたいというハングリー精神を持っていた。 ・失敗に対し、何がよくて何が悪かったのかを冷静に考え、プラス思考で実行した。 <p>○「志あるところに道ありき」という言葉には、山下さんのどんな思いがこめられているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・だれもが持っているその人のよさや、自分の好きなことを見つけよう。 ・夢や目標を持つことは、自分を生かすことにつながる。 ・夢を持ってはじめて実現できるように努力することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「できるときに、できることをやる」という生き方を参考にさせたい。 ・恩師油野先生に書いた手紙をじっくりと読ませたい。 ・「志」を「夢」や「目標」と置き換えて考えさせてもよい。

村を救った郷土芸能

因幡の傘踊り 山本徳次郎

明治二十九年（一八九六年）（注①）の春のことである。十七歳の徳次郎は、連日連夜、二階の自分の部屋にとじこもり、ドンドンと足を踏み鳴らしては傘を振り回していた。かと思うと、その後物思いにふけるといった様子であった。長期間にわたるこのような様子から、村中では徳次郎に狐が憑いたぞと噂し、家族は心配して、祈禱師をよんだほどであった。



徳次郎は、明治十二年九月十三日宇部野村清水の庄屋山本清吉の次男として生まれ、二歳のとき法美村高岡の大地主山本梅三郎の養子となった。恵まれた環境

の中で因幡高等小学校（現在の久松小学校）を卒業し、その後、若者頭を務めるなど必然的に村のリーダーとなっていた。

そのころ、因幡地方では賭博（かけごと）がはやり、若者の間に広まっていた。高岡村も例外ではなかった。若者達は花札

を用いた博打に夢中になるあまり、家業の農業はおろそかになり、退廃的な空気が漂う中、村は荒廃していった。若者のリーダーであった徳次郎は、この様子に心を痛めていた。

このような村を救うには、どうしたらいいのか。悩んだ末、これに代わる健全で正しい娯楽をつくらなければならないと思いついたのである。

ある時、祖母が雨乞い踊りの話をしてくれた。「牛頭（高岡神社）の神主さんが、笠に長い柄をつけて踊りんさったちゅうがな、ひときわ目立っていたそうな。」その話に徳次郎ははっとひらめいた。徳次郎は剣道の達人であったので、「剣舞の型を踊りに取り入れて振り付けすれば、若者連中も喜ぶ勇壮な踊りがつくれるに違いない！」これが、「因幡の傘踊り」を着想した瞬間である。それ以来、自分の部屋にこもり、傘作りと踊りの研究に没頭したのである。

五月の田植えの後、いよいよ徳次郎は村の若者達を集めて完成した踊りを舞って見せた。その勇壮活発な舞いと鈴の音に若者達は驚き、目を見はった。そして、村の将来について悲願を打ち明けた徳次郎の情熱に心打たれた若者達は、次々に徳次郎のまわりに集まり、傘作りと踊りの練習に熱中するようになったのである。

初披露は、六月三十日の高岡神社の夏祭りであった。十数人の若者が境内けいだいに登場するや、村人は、その華麗で勇壮、凛々りりしい踊りに時の過ぎるのも忘れて夢中になった。

この因幡の傘踊りは、百個もの小鈴をつけ、赤、白、青、金、銀と美しく彩った長柄ながえの傘を使い、踊り手はそろいの単衣ひとえ（ゆかた）に手甲てこう脚絆きゃはん、白鉢巻はちまき、白たすきの凛々しい姿で、歌に合わせて傘を回転させながら強弱のリズムよく振り回す、勇壮で



動きの激しい踊りである。全国でも珍しい独特の伝統芸能であり、昭和二十七年には「日本国無形文化財」に選定された。

徳次郎は、消防団小頭こがしら、信用組合役員、宇部野村会議員等を歴任した後、昭和四十三年に八十八年の生涯を閉じた。

その後、昭和四十五年の大阪万国博覧会では三度の公演。昭和四十九年には「鳥取

県無形民俗文化財」に指定。平成五年には北京で初めての海外公演。七年にはニューヨーク、十四年に二度目の北京公演。活動の場は海外にも広がり、行く先々で拍手喝采かっさいを受けた。徳次郎は、平成九年に国府町名誉町民となった。

徳治郎が生前モットーとしていた「明るい村づくり人づくり」の精神は、因幡の傘踊りと共に地域の若者達に受け継がれ、現在も世界に友情と交流の輪を広げている。

(国府中学校 自作)

注①： 明治三十二年の説もある。



【村を救った郷土芸能

～因幡の傘踊り 山本徳次郎～

一 ねらい

「傘踊り」に込められた思いを考察することを通して、ふるさとの先人を敬い、凜とした生き方を志す態度を育てる。

二 資料選定の理由

・荒廃していく村の若者たちの心を、正しく健全なものに取り戻すため、後に「因幡の傘踊り」と呼ばれ、無形民俗文化財にも指定された郷土芸能を、不屈の精神で作り上げた山本徳次郎の生き方を描いた資料である。

・伝統芸能の素晴らしさを味わわせるとともに、山本徳次郎の生き方を通して、今後の自分の生き方について見つめ直させたい。

三 参考文献

- ・『鳥取市人物誌 きらめく120人』鳥取市
- ・『国府町郷土読本 ふるさと国府』国府町教育委員会
- ・「山本徳次郎翁顕彰の会」ホームページより転載
- ・DVD中の傘踊りの動画：日本海テレビ鳥取営業部

四 展開例

学習活動 ○ 主な発問・予想される生徒の反応	指導上の留意点
<p>1 因幡の傘踊りのビデオを見て感想を話し合う。 ○ビデオを見てどんなふう感じたか。 ・格好いい・激しい・エネルギッシュ</p> <p>2 資料を読んで徳次郎さんの思いについて話し合う。 ○格好よさの秘密は何だろう。どこに格好よさを感じたか。 ・剣舞の型を取り入れた振り付け ・澄み切った鈴の音 ・勇壮、華麗で、凛々しい踊り ◎この踊りにはどんな思いが込められているか。またその実現のために踊りが表現しているものは何か。 ・健全な娯楽を通して若者の更生を図りたい。 ・村の再生を図りたい。 ・堂々とした、揺るぎない生き方 ・凜とした生き方 ・剣の道に通じる生き方 ・徳次郎自身の生き方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・傘踊り保存会のビデオを見せ、格好よさに注目させる。 ・傘等実物を借りておく。 ・まずはビデオを思い起こしながら考えさせる。 ・「傘踊り」の持つ勇壮さ、華麗さ、凛々しさを感じ取らせたい。 ・込められた思いを考察し、さらに深めることで踊りそのものが持つ力に気付かせたい。 ・格好よさの秘密について改めて確認する。 ・踊りの持つ力に思い至らないようであれば、再度ビデオを見せてもよい。 ・山本徳次郎翁顕彰の会が存在し、今なお多くの人に慕われていることを伝える。

伝記資料作成のポイント

一 伝記に学ぶメリット

人は人を見て育ちます。具体的な人の生き方から、子どもたちは、人生を生き抜く本物の知恵や大切な志を学ぶことができます。是非、本書の資料を参考に地域の人物資料を作成し、道徳の授業で心に残る出会いをさせてください。

- ① 人生の師を見つけることができる
- ② 自己を鍛えてくれる
- ③ 美しく生きることを教えてくれる
- ④ 勇気を与えてくれる
- ⑤ 逆境の中を生き抜く知恵を教えてくれる
- ⑥ 真実を見抜く目を養うことができる
- ⑦ 人生の楽しみを学ぶ
- ⑧ チャレンジ精神に学ぶ
- ⑨ 獨創性や探究心の追究の大切さを学ぶ
- ⑩ 一期一会を大切にしよう生かすか学ぶ

二 伝記の人物を選ぶ基準

本書では、今後、人物資料を作成される際の参考になるよう、地域で活躍されている方の資料も掲載しています。総合的な学習の時間にお世話になった方の資料を作成し、道徳の時間に活用することによって、さらにふるさとへの思いや生き方を深く学ぶことができます。

子どもは、人の生き方や信念に出会うことによって、その人に憧れ、心の中に夢や希望の炎をともします。

- ① 人間としての魅力があるか
- ② 子どもに夢や希望を与えるか
- ③ 学ぶに値するものがあるか
- ④ 人生観や価値観が汲み取れるか
- ⑤ 成し遂げたものがあるか
- ⑥ 子どもにやる気を起こさせるか
- ⑦ 世間から好感度を持って評価されているか
- ⑧ 思想信条が偏向していないか

地域が誇る人物
の資料を作って
みましょう！



三 選んだ伝記や偉人伝をどのように資料化するか

子どもが目標とする人物との出会いを作るのが、道德の時間です。心のアンテナを高くして、子どもに伝えたい題材や人物を探しましょう。その人物に対する教師の感動が、授業や子どもを変えます。資料の文中に「命は大切、かけがえない」と直接書くのではなく、じわっとそれを感じるように作ることが、心に響く資料のポイントです。

① 人物の生涯全体を把握する

↓ 人物の生涯を誕生から一通り把握する。

② どういう環境や境遇で育ったのか

↓ たくましい精神力と不屈の精神をもって、どのようにして障がいや難局を乗り越えたか。

③ 偉業をなしたきっかけは何であったか

↓ 業績や成果を挙げたきっかけや転機は何であったか。

④ その人物が一番大切にした信念は何か

↓ 生涯を貫いている信念は何であったか。

↓この信念こそがねらいとする道德的価値になる。

⑤ 複数の伝記や偉人伝を読み比べる

↓ 伝記の著者によって、評価にかなりの違いが出る場合がある。

客観的で適正な資料にするため、できる限り多くの伝記を読み比べることが大切。

⑥ 限定されたエピソードで終わらないこと

↓ 道德的価値ありきで資料化すると、人の生き方や在り方が見えなくなってしまう。

6つのポイントを大切に！



各資料の中心となる内容項目一覧

集 学 年	視点と内容項目 資料名	1						2						3			4									
		主として自分自身に 関すること						主として他の人との かかわりに関すること						主として自然 や崇高なものの かかわりに関すること			主として集団や社会とのかかわりに関 すること									
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
低 学 年	わたしの音楽を求めて ～岡野貞一～	★							★																	
	ようこそ ようこそ ～因幡の源左 足利喜三郎～																									
	すきな絵の勉強も ～遠藤 董～	★																								
	桃の木物語 ～西村良夫～																									
	すいせんの里 百谷 ～松本貞義～																									
	貝から節の先生 ～鈴木みどり～																									
	血まわして元気な町に～山本 勲～																									
	音楽に一生を捧げた人生 ～岡野貞一～																									
	夢に向かって走り続ける ～野人 岡野雅行～	★																								
	アジックス創業者 ～鬼塚喜八郎～	★																								
わがものは社会のもの ～寛 雄平～																										
自分の意志で道を切り開く ～女子走り幅跳び・岸本幸子選手～	★																									
医学の発展にかけた生涯～下田光造～																										
桜のあしながおじさん ～瀬川弥太郎～																										
音のないワールド ～夢に向かって跳び続ける前島博之～	★																									
我が国最初のX線実験者 ～村岡範為馳～																										
これからの日本のためには 英字新聞 が必要だ ～山田季治～	★																									
高 学 年	しゃんしゃん祭りの創始者 ～高田 勇～																									
	志あるところに道ありき ～山下佐知子物語～																									
	村を救った郷土芸能 ～因幡の傘踊り 山本徳次郎～																									
中 学 年																										
中 学 校																										

鳥取市の志

鳥取市小・中学校道德郷土資料作成検討委員会委員

	氏 名	所 属	職名
講師	竹 内 善 一	元鳥取大学教授	
1	前 田 哲 雄	浜村小学校	校 長
2	須 崎 聡	江山中学校	”
3	細 井 実	稲葉山小学校	教 頭
4	高 見 久美子	用瀬小学校	”
5	村 尾 行 也	青谷中学校	”
6	田 口 謙 二	桜ヶ丘中学校	教 諭
7	河 合 真由子	南中学校	”
8	奥 田 啓 子	北中学校	”
9	山 根 美 帆	高草中学校	”
10	米 澤 晶 子	久松小学校	”
11	福 壽 真一郎	修立小学校	”
12	廣 東 由 香	美保小学校	”
13	赤 堀 章 代	美和小学校	”
14	乾 道 夫	大正小学校	”
15	河 野 裕	津ノ井小学校	”

鳥取市教育委員会学校教育課関係者

木 下 法 広	保木本 倫 久
木 村 正 人	石 谷 健二郎
長谷川 誠 一	吉 田 幸 恵

●表紙・表紙裏の題字

柴山 抱海

●写真や図版の提供

・各人物の顔写真

『鳥取市人物伝きらめく120人』より転載

・各資料中の写真

鳥取市立久松小学校、醇風小学校、用瀬小学校、稲葉山小学校、浜村小学校、散岐小学校、明治小学校、美和小学校、河原第一小学校、東中学校、鳥取県立図書館、鳥取県立公文書館、株式会社ジャパンタイムズ、山本徳次郎翁顕彰の会、株式会社日本海テレビ鳥取営業部、鳥取市観光コンベンション推進課、鳥取市立あおや郷土館、鳥取市ホームページ、鳥取県中学校教育研究会道德部会、日本文教出版株式会社

平成 25 年度 鳥取市小・中学校道德郷土資料集
「鳥取市の志」

平成 25 年 12 月 24 日

編集・発行	鳥取市教育委員会学校教育課指導係
所在地	鳥取市上魚町39番地
電話番号	0857-20-3357
印刷会社	(有)福井印刷

